

令和 7 年度
モルディブ共和国訪問 報告書



令和 7 年 (2025 年) 12 月

小田原市

目次

1. 訪問の目的	1
2. 訪問の経緯	1
3. これまでの交流の主な経緯.....	3
4. 訪問者.....	5
5. 訪問スケジュール.....	5
6. モルディブ共和国に関するデータ・概要	7
7. 訪問の概要	29
8. 参加した公式行事等	84
9. 協力いただいた公的機関等.....	84
10. 訪問所感	85
11. 今後想定する展開	87
(参考文献)	88
(参考資料)	90

1. 訪問の目的

モルディブ共和国と小田原市の約 10 年に及ぶ交流の実績を踏まえ、都市間交流を望んでいる同国のフォームラク市を訪問し、今後の交流（市民交流や気候変動対策、環境、観光など）に向けた可能性を検討する。

特に、気候変動による海面上昇によって水没の危機にあるモルディブの現状を知り、その不安や苦しみを分かち合う関係を築くことで、気候変動対策を私たち一人一人が自分事として取り組む契機とする。

また、シャフラズ・ラシード駐日モルディブ共和国臨時代理大使から、令和 7 年（2025 年）7 月 26 日に開催されるモルディブ共和国独立 60 周年記念式典への招待を受けたことから、同式典に出席するとともに、政府関係者等と意見交換を行い、今後の交流を見据えた協力依頼と友好関係を築く機会とする。

2. 訪問の経緯

平成 26 年（2014 年）、モルディブ共和国大統領（当時のアブドゥラ・ヤーミン大統領）が、実務訪問賓客として日本を公式訪問される際、視察先の選定に当たり、「都心から短時間で到着できること」、「豊富な日本文化に触れられること」、「水産業が盛んであること」というニーズに十分応えられることのできる都市として、外務省を通じて小田原訪問が企画された。

訪問は、大統領の体調不良により急遽中止となつたが、これを契機として、翌年の平成 27 年（2015 年）から 5 年間にわたり、小田原での国際交流イベント「地球市民フェスタ」に駐日モルディブ共和国大使館が参加することとなつた。

また、東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会の際には、事前キャンプに関する協定を締結し、バドミントン強化練習生の受け入れ及び交流や、大統領（当時のイブラヒム・モハメド・ソーリフ大統領）による事前キャンプ練習施設等の視察など、約 10 年間にわたり交流を続けてきた。

このような交流の実績を踏まえて、令和 7 年（2025 年）1 月 14 日、駐日モルディブ共和国シャフラズ・ラシード臨時代理大使が、赤道付近の島で同国内 3 番目の都市である「フォームラク市」の市長書簡を持参の上、本市を訪問された。大使からは、「モルディブ政府・フォームラク市・駐日モルディブ共和国大使館は小田原市との姉妹都市提携や今後の交流を進めたい意向がある」ことが示され、さ

らに「モルディブ共和国独立 60 周年の本年にぜひ同国を訪問してほしい」との招待を受けた。

また、同月 25 日には、本市で開催した「小田原海外市民交流会・小田原箱根商工会議所・小田原市」の 3 者主催による気候変動をテーマとした国際シンポジウムに、シャフラズ・ラシード臨時代理大使を招聘し、講演していただいた。このシンポジウムにおいて、国土の 8 割が海拔 1 m 未満であり、気候変動による海面上昇によって水没の危機にあるモルディブ共和国の切実な窮状が語られたことなどから、同国を訪問することで、不安や苦しみを分かち合う関係を築き、気候変動対策に私たち一人一人が自分事として取り組む契機にしたいと考えた。

またその際、同大使から「7 月 26 日にモルディブ共和国の首都マレで開催される独立 60 周年記念式典に小田原市長に出席してほしい」と市長が直接招待を受けた。

このようなことを踏まえ、今後の市民交流の可能性や、気候変動対策、環境、観光などの分野において都市間交流の可能性を検討するため、実際に現地を訪問し、関係者との交流や意見交換、視察などを行うこととした。



3. これまでの交流の主な経緯

年	月	内 容
2014年 (平成 26年)	4月	<p>モルディブ共和国大統領（当時のアブドゥラ・ヤーミン大統領）が、実務訪問賓客として日本を公式訪問される際、視察先の選定に当たり、「都心から短時間で到着できること」、「豊富な日本文化に触れられること」、「水産業が盛んであること」というニーズに十分応えられることのできる都市として、外務省を通じて小田原訪問が企画された。</p> <p>その後、大統領の体調不良等の理由により、訪問は中止となつたが、後日、大統領訪問準備のお礼のため、駐日モルディブ共和国カリール大使が市長を訪問された。</p>
2015年 (平成 27年)	1月	副市長が駐日モルディブ共和国大使館を訪問し、カリール大使と面談。東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会の際の事前キャンプを含め、幅広い交流を提案した。
	2月	国際交流イベント「地球市民フェスタ」に駐日モルディブ共和国大使館が参加した。(以降、毎年参加)
2016年 (平成 28年)	2月	カリール大使、ムーサバドミントン協会会長らが小田原アリーナを視察した。
	11月	ムーサバドミントン協会会長が市長を表敬訪問した。
	12月	バドミントン女子ジュニア強化選手の合宿の受け入れを実施した。(12/15~18)
2017年 (平成 29年)	3月	市長が駐日モルディブ共和国大使館を訪問し、シャリーフ大使と面会。東京 2020 オリンピック・パラリンピックに向け、ホストタウンの枠組みを活用した交流を提案した。
	4月	シャリーフ大使が小田原を訪問。城山陸上競技場、小田原アリーナを視察したほか、小田原城、鈴廣かまぼこ恵水工場を見学した。
	5月	ホストタウンの第4次申請を提出した。
	7月	ホストタウン登録がされた。

2017年 (平成 29年)	10月	大使館より、10月25日から27日の日程で、モルディブ共和国オリンピック委員会の副会長が来日し、事前キャンプに関する協定の締結をしたいと打診があった。
		26日、小田原市にて事前キャンプに関する協定を締結した。(市長、モルディブ共和国オリンピック委員会副会長)
2018年 (平成 30年)	3月	バドミントン男子ジュニア選手の受け入れを実施した。
	7月	駐日モルディブ共和国大使に就任したイブラヒム・ウェイス大使が市長を表敬訪問した。
2019年 (令和元年)	10月	ソーリフ大統領、シャーヒド外務大臣など約20名が小田原を訪問し、城山陸上競技場(オリンピック事前キャンプの練習施設)と鈴廣かまぼこ工場を視察した。
2023年 (令和 5年)	3月	駐日モルディブ共和国大使に就任したハッサン・ソービル大使が市長を表敬訪問した。
	6月	アミート副大使が小田原市を訪問。姉妹都市や交流について意見交換をした。
2025年 (令和 7年)	1月	14日、ラシード臨時代理大使が小田原市を訪問。姉妹都市や交流について意見交換とともに、フォームラク市長からの招待状を持参した。(参考資料 p. 91)
		25日、「小田原海外市民交流会・小田原箱根商工会議所・小田原市」の3者が主催した国際シンポジウム「たったひとつの地球に住み続けるために私たちが今できること」においてラシード臨時代理大使が講演。(参考資料 p. 92)
		この際、市長が7月26日に開催予定の独立60周年記念式典への出席の招待を受けた。
	6月	16日、ラシード臨時代理大使が小田原市を訪問。都市・地方自治・公共事業省副大臣からのモルディブ訪問に関する招待状を持参した。(参考資料 p. 100)
	7月	23日～27日、市長ほか市職員2名が、モルディブ共和国を訪問した。

4. 訪問者

小田原市長	加藤 憲一
環境部副部長（ゼロカーボン推進課長事務取扱）	山口 一哉
文化部文化政策課長	早野 智洋

5. 訪問スケジュール

月 日	現地時間	日本時間	内 容
7月 22日(火)	—	22:55	羽田空港発
7月 23日(水)	5:10	6:10	シンガポール チャンギ国際空港着
	10:20	11:20	シンガポール チャンギ国際空港発
	11:50	15:50	モルディブ共和国 ヴェラナ国際空港着
	13:00	17:00	マレ島内でモルディブ政府職員、日本国大使館職員と昼食
	15:25	19:25	ヴェラナ国際空港（国内線）発
	16:50	20:50	フォームラク空港着
	17:00	21:00	空港にてフォームラク市イスマイル市長らと懇談
7月 24日(木)	20:00	24:00	フォームラク市による歓迎夕食会
	8:45	12:45	フォームラク市庁舎にて意見交換
	9:30	12:20	フォームラク市内視察（防潮堤、港、海岸線、廃棄物管理施設、自然公園（2箇所）
	12:20	16:20	GNアトール教育センターにて、科学・環境クラブの生徒と意見交換
	13:20	17:20	フォームラク市職員らと昼食
	15:20	19:20	フォームラク港発 漁業体験
	20:00	24:00	フォームラクの物産などを取り扱うオーセンティックセンターを視察

7月25日(金)	4:50	8:50	フォームラク空港発
	6:55	10:55	ヴェラナ国際空港(国内線)着
	9:00	13:00	マレ島視察
	12:00	16:00	石神在モルディブ日本国大使らと昼食
	16:00	20:00	ビリンギリ島視察
	19:30	23:30	元駐日モルディブ共和国大使(元外務担当国務大臣)アハメド・カリール氏らと夕食
7月26日(土)	6:00	10:00	独立60周年記念国旗掲揚式に参列(モハメド・マイズ大統領への拝謁)
	9:30	13:30	モルディブ共和国外務省アミン・ジャベド・ファザイル局長と意見交換
	12:00	16:00	アブドゥラ・カリール外務大臣主催の昼食会に出席(モルディブ外務省幹部、生稻外務大臣政務官、石神在モルディブ日本国大使ら同席)
	16:00	20:00	独立60周年記念式典に参列
	18:00	22:00	フルマーレ島視察
7月27日(日)	6:00	10:00	ビリンギリ島視察
	13:15	17:15	ヴェラナ国際空港発
	21:05	22:05	シンガポール チャンギ国際空港着
	22:50	23:50	シンガポール チャンギ国際空港発
7月28日(月)	—	6:45	羽田空港着

6. モルディブ共和国に関するデータ・概要¹

(1) 一般

ア 面積

298 平方キロメートル（全島総計。東京 23 区の約半分）。1,192 の島々より成り、その内約 200 が有人島である。

イ 人口

51.5 万人（2022 年モルディブ政府資料）

（内訳は、モルディブ人 38.3 万人、外国人 13.2 万人。いずれもモルディブ在住の人口）

ウ 首都

マレ

エ 都市

モルディブでは 2010 年に地方分権法が制定され、人口 25,000 人以上が都市（City）として指定された。²2016 年に地方分権法の改正により人口要件が 10,000 人になったことからフォームラク市が第 3 の都市として指定され³、2020 年にはセンサスの結果により、新たに人口要件を満たしたクルドゥフシ市が指定された。⁴

5 つ目の都市として 2023 年ソーリフ政権下でティナドゥーの指定が行われたが、人口要件を満たしていないとの疑義が提起され、法的・制度的

¹ 外務省モルディブ共和国基礎データを参考に作成

<<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/maldives/data.html>>

² REVIEW OF THE DECENTRALIZATION FRAMEWORK IN THE MALDIVES, 2019, Transparency Maldives, p.38

<https://transparency.mv/wp-content/uploads/2019/08/RDFM_ENG_FINAL-for-Website.pdf>

³ Fuvahmulah declared Maldives' third city, Maldives Independent

<<https://maldivesindependent.com/politics/fuvahmulah-declared-maldives-third-city-126687>>

参照2025-11-06

⁴ モルディブ共和国大統領室プレスリリース

<<https://presidency.gov.mv/Press/Article/22900>> 参照2025-11-06

な混乱が続いた。その後、2024年3月にムイズ大統領が正式に「都市」として承認し、⁵現在は5つの都市が存在する。⁶

オ 民族

モルディブ人

カ 言語

ディベヒ語

(今回訪問したマレ市やフォームラク市では、日常の中で英語が使われており、訪問中の会話も英語で行われた。)

キ 宗教

イスラム教（国教）

モルディブでは、サラートと呼ばれるイスラム教の礼拝が1日5回（夜明け前、正午過ぎ、午後、日没後、夜）行われる。

ク 国祭日

7月26日（独立記念日）

ケ 略史

年月	略史
12世紀	イスラム化の進展
1558～1573年	ポルトガルの支配
17世紀	オランダ東インド会社の間接統治下に
1887年	英國保護領に
1965年	英國保護領から独立、国連加盟
1967年	日・モルディブ外交関係樹立

⁵ モルディブ共和国大統領室プレスリリース

<<https://presidency.gov.mv/Press/Article/30520>> 参照2025-11-10

⁶ 2024年末12月に高裁が審理できないという形で訴えを棄却された後、申立人は民事訴訟で争うとの意向を示している

The Edition, Thinadhoo city status dispute to be redirected to Civil Court

<<https://edition.mv/felidhoo/38457>> 参照2025-11-10

1968 年	スルタン制 ⁷ を廃止し、共和制に
1985 年	英連邦加盟
2005 年	複数政党制を導入
2008 年	新憲法制定
2016 年	英連邦離脱を宣言
2020 年	英連邦復帰

（2）政治体制・内政

ア 政体

共和制

イ 元首

モハメド・ムイズ (H. E. Dr. Mohamed Muizzu) 大統領

2023 年 9 月、ソーリフ大統領の任期満了に伴う大統領選挙が実施され、PPM を始めとする野党連合のモハメド・ムイズ大統領（人民国民会議 (PNC)）が選出された。

ウ 議会

一院制（議席 93：小選挙区制、任期 5 年）

エ 政府

(ア) 首相 なし

(イ) 外相 アブドウッラ・カリール (H.E. Dr. Abdulla Khaleel)

（3）外交・国防

ア 外交基本方針

独立以来非同盟中立政策を外交の基本方針とし、全ての国との良好な関係維持に努めている。

イ 注力事項

気候変動、環境保全、人権

⁷ スルタン制：イスラム世界で「スルタン」と呼ばれる君主が国を治める仕組み。宗教的指導者とは別に、政治や軍事を担当した統治体制。

ウ 在外公館

在外公館は 18 公館

大使館 : 16 (バングラデシュ、英国、インド、マレーシア、パキスタン、シンガポール、スリランカ、中国、日本、サウジアラビア、UAE、ドイツ、タイ、米国、ベルギー、スイス)、代表部 : 2 (国連、ジュネーブ)

エ モルディブに大使館を設置している国

11 か国

(インド、中国、バングラデシュ、スリランカ、パキスタン、サウジアラビア、日本、UAE、英国、米国、オーストラリア)

オ 軍事力

(ア) 国防費 1.2 億米ドル (2023 年)

(イ) 兵役 志願制

(ウ) 兵力 約 4,000 人、湾岸警備隊、海兵隊、消防救助隊等から成る国防軍を有する。

(出典 : モルディブ政府資料)

(4) 経済数値 (単位 米ドル)

ア 主要産業

観光、水産業

イ 名目 GDP

65.9 億米ドル (2023 年世銀資料)

(1 ドル = 150 円換算で、9,885 億円)

ウ 一人当たり名目 GDP

13,215 米ドル (2024 年世銀資料)

(1 ドル = 150 円換算で、198 万 2,225 円)

(一人当たりの GDP は南アジア最大。2011 年に後発開発途上国 (LDC) を卒業)

エ GDP 成長率

5.1% (2024 年世銀資料)

才 消費者物価上昇率

2.9% (2023 年世銀資料)

力 失業率

4.2% (2023 年世銀資料)

キ 総貿易額

(ア) 輸出 421 百万米ドル (2023 年世銀資料)

(1 ドル=150 円換算で、631 億 1 千万円)

(イ) 輸入 3,497 百万米ドル (2023 年世銀資料)

(1 ドル=150 円換算で、5,245 億 5 千万円)

ク 主要貿易品目

(ア) 輸出 魚介類、水産加工物 (2021 年世銀資料)

(イ) 輸入 石油製品、通信機材、輸送用機械、建設資材 (2021 年世銀資料)

ケ 主要貿易相手国

(ア) 輸出 タイ、ドイツ、英国、インド、フランス

(2022 年モルディブ統計局)

(イ) 輸入 オマーン、インド、UAE、中国、シンガポール

(2022 年モルディブ統計局)

コ 通貨

ルフィア

サ 為替レート

1 米ドル=15.4 ルフィア (2023 年平均、モルディブ統計局)

シ 経済概況

経済の基盤は観光と水産業である。観光は GDP の 21.5% (2023 年) を占める主な外貨獲得源。1 島 1 リゾート計画に基づき、全国 1,192 島のうち 159 島がリゾート島となっている。

2024 年の観光客は 205 万人で、多い順に中国 (26.3 万人)、ロシア (22.5 万人)、英国 (18.2 万人) である (日本は 3.1 万人)。

水産業は GDP の 3.8% (2023 年) であるが、輸出產品の 87% を占めている (2023 年)。主な魚種はカツオ及びマグロであり、特產品としてかつ

お節も生産されている。

(出典) モルディブ統計局

(5) 経済協力

・援助の目的と意義

モルディブは伝統的な親日国であり、日本は国際場裡における協力などを通じて友好・協力関係を維持している。また、同国は我が国シーレーン上の要衝に位置し地政学的な重要性を有することから、モルディブとの良好な関係を維持することは意義がある。モルディブが、ODAの効果的・効率的な活用を通じて、小島嶼国である同国の有する開発上の課題を克服しながら、持続的に経済を発展させ、更なる社会経済発展を実現できるよう支援することが期待されている。

・日本の援助の重点分野

日本は、対モルディブ国別援助方針において、「脆弱性への対応と持続可能な経済成長への支援」を援助の基本方針に掲げ、「地場産業の育成」と「環境・気候変動対策・防災」を重点分野としている。

ア 日本の援助実績（DAC 加盟国に限る）

(ア) 1985 年以来、日本はモルディブにとって最大規模の二国間援助供与国。

(イ) 日本の援助実績

- ① 有償資金協力実績（2021 年度まで、借款契約ベース） 77.33 億円
- ② 無償資金協力実績（2021 年度まで、合意文書ベース） 362.96 億円
- ③ 技術協力実績（2021 年度まで、経費実績ベース） 82.82 億円

(ウ) モルディブでは 2004 年 12 月のスマトラ沖地震によるインド洋津波の際、日本が無償資金協力で建設したマレ島の防波堤がマレ島を津波による深刻な被害から守ったことが各メディアで取り上げられ、2006 年 6 月にはモルディブ政府より日本国民に対し、同支援への感謝の意を示すべく「グリーン・リーフ賞」が授与された。

(エ) 日本は 2006 年 6 月 26 日、モルディブ政府との間で「モルディブ津波復興計画」に関する円借款（27.33 億円）の供与に関する交換公文の

署名を行った。これは津波による被害を受けた多数の小規模インフラ（港湾・下水道）の復旧を行うもので、モルディブに対する初の円借款である。

イ 主要援助国（DAC 加盟国に限る）（単位：百万米ドル）

（ア）日本 16.8（1 ドル=150 円換算で、25 億 2 千万円）

（イ）米国 4.5（1 ドル=150 円換算で、6 億 7,500 万円）

（ウ）オーストラリア 1.6（1 ドル=150 円換算で、2 億 4 千万円）

（2022 年 OECD/DAC 資料）

（6）二国間関係（日本とモルディブ共和国）

ア 政治関係

- ・1967 年 11 月の外交関係樹立以来、日本とモルディブは良好な関係を維持してきている。外交関係樹立 40 周年にあたる 2007 年には、モルディブにとって東アジア初となる駐日モルディブ大使館が開設された。また、2016 年 1 月には、在モルディブ日本国大使館が開設された。
- ・2014 年 4 月、ヤーミン大統領が同国大統領として初めて日本を公式訪問し、安倍総理との間で日・モルディブ首脳会談が行われた。会談後には「40 年以上にわたる友情と信頼に基づく協力の新たな段階に向けて」と題する日・モルディブ共同声明が発出された。
- ・2018 年 11 月にソーリフ政権が発足。ソーリフ大統領就任直後の 2018 年 12 月にはシャーヒド外相、アミール財務相、イスマイル経済開発相の 3 閣僚が訪日。
- ・2019 年 10 月の即位の礼に際してソーリフ大統領及びシャーヒド外相が訪日し、安倍総理との首脳会談、茂木外相との外相会談をそれぞれ実施した。
- ・2022 年 9 月にはシャーヒド外相が安倍元総理国葬儀参列のために大統領特使として訪日し、林外相と外相会談を行った。
- ・2023 年 11 月にムイズ政権が発足。2025 年 2 月にはインド洋会議（オマーン）において宮路外務副大臣とカリール外相が会談を行った。

イ 経済関係

（ア）対日貿易（日本国財務省貿易統計）

①貿易額

モルディブへの輸出 約 45.0 億円 (2022 年)

モルディブから輸入 約 4.3 億円 (2022 年)

②主要品目

モルディブへの輸出 機械類及び輸送用機器 (船舶用エンジン等)

モルディブから輸入 食料品及び動物 (まぐろ、かつお等)

(イ) モルディブへの邦人観光客数

31,074 人 (2024 年モルディブ政府資料)

ウ 文化関係

文化無償協力 (1979 年度から 2017 年までの累計 8 件、246.1 百万円)、

青少年交流事業の実施。

エ 在留邦人数

93 人 (2024 年外務省海外在留邦人調査統計)

オ 在日当該国人数

76 人 (2022 年 12 月法務省)

カ 日系企業総数 (拠点数)

14 (2024 年外務省海外在留邦人調査統計)

キ 津波被害支援

・東日本大震災に際し、国営テレビにて寄付を募る 24 時間テレビが放送され、集まった義援金を元にして、約 70 万個のツナ缶を支援物資として提供された。

(7) 渡航情報 (外務省海外安全ホームページ)

ア 危険情報

現在 (2025 年 7 月時点)、危険情報無し。

イ 感染症危険情報

現在 (2025 年 7 月時点)、感染症危険情報無し。

(8) 犯罪発生状況、防犯対策

ア 一般治安情勢

モルディブのリゾート島の治安は良好で、日本人を含む外国人が犯罪に巻き込まれることは少ないとされている。しかしながら、警察は、全国的な治安に関する懸念要因として「違法薬物の蔓延」、「犯罪集団(ギャング)の存在」、「暴力的過激主義の流入」を挙げ、各種対策をとっている。特に首都マレ市では、違法薬物が取引されている旨報じられており、十分な注意が必要である。

イ 防犯対策

犯罪被害に遭わないためには「自分の身は自分で守る」との心構えを持ち、最新の治安情報収集に努める、危険な場所には近づかない、多額の現金・貴重品は持ち歩かない、見知らぬ人物を安易に信用せずに警戒するなど、常に防犯を意識した行動をとることが重要である。

マレ市では、窃盗事件、特に、ひったくりが散発している。歩行中は車道側にハンドバッグ等を持たないようにする、狙われやすいスマートフォンの管理を徹底するなどの注意が必要である。

リゾート島では外国人が被害者となる犯罪例は少ないが、遊泳中の置き引きやホテル室内への侵入には十分に注意する必要がある。

ホテル滞在中は、ドアや窓の施錠を確実に行い、貴重品はセーフティーボックスを利用するなど管理を徹底する。また、多額の現金を持ち歩かず、いかなる時も荷物から目を離さない等の基本的な防犯対策を心掛ける。

ウ 実際に歩いての感覚

モルディブの政治・経済の中心地であるマレ島は、島外周の大通りから路地に入ると道幅が狭く、その上、バイクが道に沿う形でひしめくように並んでいる。島内の移動手段はバイクが多く、その交通量も多いため、歩くには若干の注意が必要である。昼間に歩いている分には治安が悪いという感覚はなく、実際に危険を感じることはなかった。

また、フォームラク市がある島においては、犯罪が起きることがあるのかと思われるほど穏やかな空気が流れており、安心して歩くことができ、治安面で不安な要素は全くなかった。車はそれほど見かけず、ここでもバイクを多く見かけたが、交通量が多くなく、一定の道幅があるため歩きやすい。

総じてモルディブは、治安が良好であり、交通の上でも歩行者ファーストの印象であった。

(9) 日本からの渡航時間

ア 国際便

首都マレの国際空港まで、乗継時間を含めて 13 時間から 17 時間。

- ・シンガポール航空

成田－シンガポール（乗継）・シンガポール－マレ

- ・マレーシア航空

成田－クアラルンプール（乗継）・クアラルンプール－マレ

- ・スリランカ航空

成田－コロンボ（乗継）・コロンボ－マレ

イ 国内便

マレからフォームラクへの移動の国内線は 1 日 2 便程度となっている。

なお、飛行時間は 2 時間程度となっている。

(10) 交流実績

ア 小田原市の交流実績

前述の経緯のとおり

イ 他都市交流

(ア) マレ市と富山市に関する都市間連携⁸

2019 年 11 月に富山市で開催された都市間連携事業に関する研修への参加をきっかけに、SDGs 未来都市である富山市にマレ市が支援を要請した。

富山市のコンパクトシティ政策や環境技術の導入により、交通、燃料転換、再エネ、有機性廃棄物循環利用の 4 分野について、島嶼地域における持続可能な環境配慮型都市の実現への貢献を目指す。

⁸ 環境省 モルディブ共和国マレ市と富山市に関する都市間連携
<https://www.env.go.jp/earth/coop/lowcarbon-asia/project/data/JP_MDV_2021_PPT_01.pdf> 参照 2025-11-7

【モルディブ共和国マレ市】

- ・人口過密、気候変動への脆弱性
- ・2030 年 CN 宣言
- ・土地制約により再エネ普及が進まずディーゼルに依存
- ・廃棄物の不十分な管理

(イ) NPO 法人アジア太平洋こども会議・イン福岡による青少年交流⁹

- ・活動目的

アジア太平洋諸国・地域のこども達に対して、交流促進への支援などに関する事業を行い、アジア太平洋諸国・地域のこども達が、国や地域、文化について考察し、言葉や文化・政治・宗教の違いを乗り越えて友情を育み相互理解を促進し、平和を願う豊かな国際感覚あふれる青少年の育成に寄与する。また、これらの活動を行うことで、世界の平和と共生を実現させることを目的としている。

- ・「BRIDGE Challenge Trip」

毎年春に小学生 5 年生～高校 3 年生の福岡のこども達を対象とした海外ホームステイチャレンジプログラムである。訪問国・地域では NPO 法人アジア太平洋こども会議・イン福岡と長年の交流実績がある公的機関が受入窓口となり、現地での交流をサポート。1 団 18 名（こども団員 15 名、大人の引率者 3 名）で 1 か国・地域を訪問し、ホームステイや学校訪問、文化交流等を通じて様々な異文化体験を行う。また、訪問国へ渡航するまでに数回に渡って事前研修を行い、現地での交流に向けて準備を行う。

【過去の派遣実績】

2004 年度～2023 年度の過去 20 年間：12 回実施（モルディブ訪問）

【交流内容】

5 泊 7 日：ホームステイ 4 日間

⁹ NPO 法人アジア太平洋こども会議・イン福岡 BRIDGE Challenge Trip
<<https://apcc.gr.jp/bridge-challenge-trip/>> 参照 2025-11-7

(ウ) さくらサイエンスプログラム¹⁰

科学技術振興機構の「さくらサイエンスプログラム」は産学官の連携により、アジアなどの若者を日本に招へいし、日本の科学技術を体験してもらう事業。過去には、モルディブの高校3年生3名と教員1名が訪日している。

ウ 姉妹都市・友好都市

現在、モルディブ共和国の都市において、他国・地域との都市と姉妹都市・友好都市を締結している都市は無い。

(11) 環境

ア 平均海拔

1.51 m

イ 影響

環礁国であり、気候変動や津波等の自然災害に脆弱である。

ウ 島の特徴¹¹

環礁を構成する島は死んだサンゴのかけらが堆積して作られており、そのため海平面高度は低く、高低差も極めて小さい。このことが理由で、暴風雨や自然の浸食などで島が消えたり、現れたりする。最も標高が高いのは、国際空港のあるフルレ島（空港島）の北に埋め立てられたフルマーレ島で、標高は2 mである。

エ 気候¹²

モルディブの気温は通年25~32°Cで、日本と比べると季節の変化は少ないものの、北東からの季節風が吹く乾期（12~3月）、南西からの季節風が吹く雨季（4~11月）がある。4月が最も暑い。

降水量には地域差があり、国のはば中央に位置する首都マレの年間降水

¹⁰ さくらサイエンスプログラム <<https://ssp.jst.go.jp/>> 参照 2025-11-7

¹¹ 荒井悦代・今泉慎也（編著）.エリア・スタディーズ 186 モルディブを知るための35章.明石書店.2021年,P17.18

¹² 荒井悦代・今泉慎也（編著）.エリア・スタディーズ 186 モルディブを知るための35章.明石書店.2021年,P20

量は 1,664 mm であるが、南部のガーフ・ダール環礁では 2,319 mm と降水量が多く、南部ではココナツやパンノキなどの植物もよく育つ。

オ 島の高度¹³

北部、中部、南部で島の形状は違うが、中部の島では最高高度が 1.4m であり、居住域の高度は 1.0~1.2m となっている。ここでいう高度は平均海面からの高さであり、満潮時の水位からわずか 0.5m の高さに住んでいることになる。

モルディブの多くの島では、人々は満潮時の水面から高さ 1m 以内の土地で生活している。

※1,000 以上の島々からなるモルディブは、その国土の 8 割が海拔 1m 未満である。

カ 人がいなくなる島¹⁴

さまざまな理由から島民全員が別の島に移住することがある。

1993 年にヌーヌ環礁トレンドゥ島の住民がケンディクルドゥ島に移住したのは、深刻な浸食が原因となっている。

キ ゴミの島（ティラフシ島）¹⁵

ティラフシ島は、モルディブ全土から収集された廃棄物を処理するための島であり、1992 年から埋め立てが開始され、廃棄物による埋め立てによって造成された土地の一部は工業団地などに活用され、民間に貸し出されている。島内ではいくつかのリサイクル活動が行われているものの、過去には手作業での分別が行われていたため、廃棄物が頻繁に焼却され、マレ地域や近隣の島々で大気汚染を引き起こしていた。

現在では手作業による焼却処理は行われておらず、廃棄物を燃やすこともなくなったが、廃棄物の自然発火が依然として頻繁に発生しており、そ

¹³ 荒井悦代・今泉慎也（編著）.エリア・スタディーズ 186 モルディブを知るための 35 章.明石書店.2021 年,P27.28.115

¹⁴ 荒井悦代・今泉慎也（編著）.エリア・スタディーズ 186 モルディブを知るための 35 章.明石書店.2021 年,P21

¹⁵ 荒井悦代・今泉慎也（編著）.エリア・スタディーズ 186 モルディブを知るための 35 章.明石書店.2021 年,P17.136

の制御が難しい状況が続いている。

ク 廃棄物処理¹⁶

急速な人口増加、ライフスタイルと消費パターンの変化、および観光セクターの急速な成長により、廃棄物管理は最大の課題の 1 つと見なされている。現在、ごみ収集サービス、処理、廃棄物システムは限定的でしかない。マレ以外の島民は指定された処分場に自分で廃棄物を運ぶ必要があるが、多くの場合、砂浜、海、茂みへの投棄、廃棄物の野焼きが行われる。このような不適切な廃棄物管理は、環境に悪影響を及ぼし、海への無秩序な廃棄物管理は、サンゴ礁に影響を与え、モルディブの島々の美しさを損なう恐れがある。

インフラ・予算が不十分で、施設の能力が低く、規制を施行することが難しいため、小さな島では廃棄物管理の状況は良くない。

(12) 気候変動¹⁷

1,000 以上の島々からなるモルディブは、その国土の 8 割が海拔 1 m 未満であり、気候変動の影響が最も大きい国の一とになっている。国連の「気候変動に関する政府間パネル」の報告書によると、温暖化が最も進んだ場合、2050 年ごろには世界平均で 30cm 前後の海面上昇が予測されている。世界銀行は、最悪の場合 2100 年までにモルディブ全体が水没する可能性があるとして、対策の必要性を訴えている。

ア 背景¹⁸

気候変動に関する政府間パネル (IPCC) の第 5 次評価報告書によると、1901 年から 2010 年の約 100 年の間に海面は約 19cm 上昇しており、モル

¹⁶ 荒井悦代・今泉慎也（編著）. エリア・スタディーズ 186 モルディブを知るための 35 章. 明石書店. 2021 年, P127

¹⁷ 荒井悦代・今泉慎也（編著）. エリア・スタディーズ 186 モルディブを知るための 35 章. 明石書店. 2021 年, P115, 116

¹⁸ 荒井悦代・今泉慎也（編著）. エリア・スタディーズ 186 モルディブを知るための 35 章. 明石書店. 2021 年, P122, 124

ディブは今後 100 年間の海面の上昇によって国土の大半が水没する危機に瀕している。また、海面上昇にともない防潮堤などの既存の防災施策の効果が低減することで、地震による津波やサイクロンによる高潮、慢性的な洪水などに対する災害脆弱性が高まっている。

さらに、気温が変化し、海水中の二酸化炭素濃度が上昇することで、観光客を魅了していた珊瑚には白化現象がみられる。砂浜や熱帯植物の減少、デング熱の増加も報告されており、これらはモルディブ最大の産業である観光業にとって大きなリスク要因となっている。

モルディブは 1987 年の国連総会において、気候変動に取り組む必要性を提唱した初めての国である。

(13) 経済¹⁹

1965 年の独立当時、漁業中心の貧しい国だったモルディブは半世紀を経て高位中所得国（一人当たり GNI3,996 ドル～1 万 2,375 ドル）へと発展した。モルディブの一人当たり GNI（国民総所得）は 2000 年は 2,070 ドルだったが、10 年後の 2010 年には 5,960 ドル、2019 年には 9,670 ドルと 20 年で 5 倍近くに増えており、モルディブ経済は大きく発展してきた。GDP（国民総生産）の成長率も、2005 年は前年 12 月のスマトラ島沖地震による被災と、2009 年は世界金融危機の影響により一時落ち込んだものの、それ以外は平均 6 ～ 7 % の経済成長を続けている。

モルディブでは、農作物を植えたり、工場を作ったりする十分な土地を確保することは難しい。そのため、モルディブの人々の生活は、自国で採れる魚とバナナやパパイヤなど限られたものをのぞくほとんどのものを外国からの輸入に頼らざるを得ない。したがって、モルディブの経済は海外とのつながりによって支えられているといえる。生活必需品のほとんどを輸入するため、貿易収支はおのずと大幅な赤字となる。

¹⁹ 荒井悦代・今泉慎也（編著）.エリア・スタディーズ 186 モルディブを知るための 35 章.明石書店.2021 年,P174,175

ア 産業の割合²⁰

主要産業である観光業が GDP に占める割合は 2003 年には 28% であったが、2019 年には 22% に縮小している。観光業の内で 92% を占めていたリゾートも民泊などが解禁されて 84% に低下している。唯一の輸出産業である漁業が占める割合は 4.2% (2019 年) でしかない。2010 年代に入って、インフラ整備の拡充を背景に建設業が 8 % に成長し、拡大を続ける卸業・小売業は 8 %、運輸・通信 11%、行政サービス 8 % と国内消費が経済を支えている。

イ 雇用状況²¹

人口の少ないモルディブは多くの外国人労働者を受け入れている。2016 年の外国人労働許可は 8 万 3,136 件に上り、2016 年の人口 48 万人の 17.3% に相当する労働者が外国から入っている。多くはバングラディッシュ (46.5%)、インド (24.9%)、スリランカ (12.2%)、中国 (3.3%)、ネパール (2.8%)、フィリピン (2.2%)、インドネシア (1.6%)、パキスタン (1.3%) といった近隣諸国からとなっている。これらの労働者の従事する産業や職業はおおむね固定しており、建設現場やホテル、レストラン、観光業などである。

ウ 輸出品²²

国内からの輸出のうちの 96% は魚であり、輸出のほとんどを漁業関連製品が占める。魚はおもに冷蔵・冷凍の状態で輸出されるが、そのうち冷蔵・冷凍ツナ (カツオ) が 68% を占め、ツナ (カツオ) 以外の魚は 3 % 程度である。缶詰やパウチにした魚は 25% であり、海産物加工品は 1 % である。

²⁰ 荒井悦代・今泉慎也（編著）.エリア・スタディーズ 186 モルディブを知るための 35 章.明石書店.2021 年,P176,177

²¹ 荒井悦代・今泉慎也（編著）.エリア・スタディーズ 186 モルディブを知るための 35 章.明石書店.2021 年,P179

²² 荒井悦代・今泉慎也（編著）.エリア・スタディーズ 186 モルディブを知るための 35 章.明石書店.2021 年,P181,182

冷蔵・冷凍ツナ（カツオ）などの魚の輸出先は、1995年にはスリランカが最も多く、半分を占め、日本への輸出も魚の輸出の15%程度あった。2000年代に入るとスリランカへの輸出よりもタイへの輸出が上回るようになった。

エ 財政状況²³

モルディブの財政は慢性的に赤字である。その赤字幅は年によって大きく変動するが、過去30年間の財政赤字の推移をみると赤字幅は2005年と2009年に悪化している。これは2004年末のスマトラ沖地震と2008年の世界金融危機の影響が大きかったためであり、経済復興費用が負担となり財政赤字幅は2005年にGDP（国内総生産）の7.8%に拡大し、2009年には17.9%になった。その後の財政赤字は縮小傾向にあるものの、2020年は21.4%となった。

モルディブの財政において問題とされるのは、歳入では賄えない資本投資を多額の対外借り入れによって賄っていることにある。とくに2016年には、外国援助の11倍の金額が外国借入としてモルディブに流入した。その金額の大きさは、モルディブの返済能力を超えると懸念される。国の対外債務の支払い能力を示す指標である債務返済比率も上昇し始めている。2017年には3.6%だった債務返済比率は2018年には7.9%に拡大している。

2015年に6億4,800万ルフィア（約46億円）だった対外借入は2016年には4.4倍の28.5億ルフィア（約200億円）に急増した。そのうち94.2%が中国輸出入銀行からの借款である。

オ 観光業²⁴

観光業が正式にスタートした1972年の観光客数はわずか1,000名だった。その後、1980年に4万2,000人、1990年に19万5,000人、2012年に100万人を超え、2017年には132万人にまで増えていった。2000年代

²³ 荒井悦代・今泉慎也（編著）.エリア・スタディーズ186 モルディブを知るための35章.明石書店.2021年,P187,189

²⁴ 荒井悦代・今泉慎也（編著）.エリア・スタディーズ186 モルディブを知るための35章.明石書店.2021年,P199

までの観光客のほとんどはヨーロッパから来ていた。ヨーロッパ人は滞在時間が長く、リピーターとして何度も訪れるため、モルディブでは「伝統市場」の顧客として重要視されている。2010 年代に入ってから、中国など新興国の観光客が増え始め、モルディブの観光市場において大きな構造変化が生じていた。新興国の観光客は、ヨーロッパ人と異なり、滞在時間の短いツアーに参加する傾向が強い。そのため、モルディブにおける観光客の平均滞在日数は、ピーク時の 2008 年の 8.8 日から 2017 年には 6.2 日へ短縮している。

力 観光開発²⁵

モルディブの観光地は、ユニークな「1島1リゾート」方式を採用している。各サンゴ礁島の面積は 1 ~ 2 平方キロメートル程度である。通常、一つの島の開発は一つのリゾートホテルに任せられている。島の土地の所有者はモルディブ政府にあるが、使用権はホテル側にリースされている。各リゾートには、さらに運営会社を抱えている。各島では、建物や外観が統一されており、他の島と高度に差別化されている。どのリゾートにも、フルセットでレジャー施設がそろっており、電力、水道などのインフラ施設も整備されている。

モルディブは海外市場にむけて常に観光業のプロモーション活動を開き続けている。これを遂行するために、モルディブ観光を PR する専門会社も設立した。モルディブ政府と専門会社は観光フェアに積極的に出展するほか、世界各地から海洋や生態学、地理学専攻の学生を現地調査や実習に招聘し、学生市場の開拓に取り組んだ。近年、アジアの企業は海外の観光地で会議やチームビルディングを行う傾向があるが、モルディブはこれらのアジア企業の誘致にも取り組んでいる。

キ 水産業²⁶

2017 年の全漁獲量は 14 万 3 千トンで、このうちカツオが 8 万 9 千トン

²⁵ 荒井悦代・今泉慎也（編著）.エリア・スタディーズ 186 モルディブを知るための 35 章.明石書店.2021 年,P201,202

²⁶ 荒井悦代・今泉慎也（編著）.エリア・スタディーズ 186 モルディブを知るための 35 章.明石書店.2021 年,P225,226,227

(62.6%)、キハダマグロが4万9千トン(34.5%)で、この2種だけで漁獲量の97.1%が占められている。

漁獲量の68.6%が輸出に向けられ、観光業に次ぐ国の重要な外貨収入源となっている。

2017年の漁業人口は1万7,589人で労働人口の11%を占める。

モルディブでは資源の減少が深刻になれば死活問題であることから、自国海域への外国漁船の入漁や旋網漁法を禁止するなど資源保護にも努めている。

カツオはその全量が「カツオ1本釣り」漁法で漁獲されている。キハダマグロに関しては、小型の個体はカツオと同じ漁法で漁獲されるが、大型のものは竿を使わない手釣りで獲られている。なお、モルディブ人はキハダマグロを好みないので、漁獲物のほぼすべては輸出用となる。

ク カツオ・マグロの加工と輸出²⁷

モルディブにとって水産物はほぼ唯一の輸出産品である。主力はカツオとキハダマグロ、その他に香港など中華圏向けのハタ活魚にナマコ等がある。カツオは缶詰の原料として冷凍加工されたものが中心であるが、スリランカ向けにはヒキマス(モルディブ版のかつお節)に加工されたものが大量に輸出されている。

カツオの冷凍加工は全国に数カ所ある水産加工場で行われる。漁獲物は工場の港に直接水揚げされ、ブライン凍結(氷点下の高濃度塩水に魚を漬けて急速に冷凍する方法)したものを冷凍庫に保管、その多くは専用の冷凍輸送船でタイの缶詰加工会社に販売されている。

近年では国内でツナ缶やレトルトパック詰めまでの最終加工も行われていて、高付加価値商品としてヨーロッパ向けに輸出されている。

水産公社への技術移転を通じて日本式のかつお節生産システムをモルディブに日本人が導入した経緯もある。この取り組みは現在も民間事業として継続されており、日本の大手かつお節会社の出資によってモルディ

²⁷ 荒井悦代・今泉慎也(編著).エリア・スタディーズ186 モルディブを知るための35章.明石書店.2021年,P227,229

ィブ最南端のアッドウ環礁に工場が建設され、かつお節生産と日本向けの輸出が行われている。

(14) 文化・生活²⁸

ア 食べ物

主食は米とガルディア（魚のスープ）。

名物では、ツナなどの魚の缶詰、塩漬けの魚、乾燥ナマコなどで世界中で利用される保存魚製品であり、国の収入源となっている。

また、2016年モルディブの国民一人当たり水産物消費量は142kgで間違いなく世界レベルであり、同年の日本で24.6kgなので、その消費規模の大きさが分かる。そして、消費される水産物の殆どがカツオとなっている。

イ 物価

モルディブは小さな島国であり、多くの物を輸入に頼っているため、運ぶための運送費がかかり、必然的に高くなる傾向にあると言われている。

観光客向けにサービスが提供されているリゾート島を除き、現地の方が住んでいる今回訪問したマレ島やフォームラク島では、物価は日本と比べてやや高いという印象で、感覚的には1.2～1.5倍といったところである。

実際、マレ島にてファストフード店に入って、「ハンバーガー、コーラ、ポテト」のセットを注文したところ、日本円で約1,500円であった。

また、旅行情報サイトでも、トイレットペーパー（4ロール）が日本で250円の場合、現地では400円との記述があるとおり、日本より若干高めである。²⁹

²⁸ 荒井悦代・今泉慎也（編著）.エリア・スタディーズ186 モルディブを知るための35章.明石書店.2021年,P62,63,224

外務省「なるほど発見！南西アジア これまでも、これからも。深化する日本とのパートナーシップ」<https://www.mofa.go.jp/mofaj/p_pd/dpr/page23_002955.html>

²⁹ ベストトラベル モルディブの物価事情を徹底解説！日本より高い？安い？実際の物価や節約術なども紹介<<https://besttravel.jp/11600>>

ウ 支払い

経済の中心地であるマレ島や居住地域であるフルマーレ島では、スーパー・マーケットで米ドルが使用できたが、人口約 7,000 人のビリングギリ島では、米ドルが使用できず、現地通貨であるルフィアのみであった。

なお、ルフィア紙幣はウォータープルーフ仕様となっており、とても綺麗でジンベイザメやカメなどのデザインが印刷されている。

エ 働き方

招待を受けたフォームラク市において、市長に市職員の勤務時間を聞いたところ、朝 8 時過ぎから午後 2 時までとのことであった。

(15) 地勢

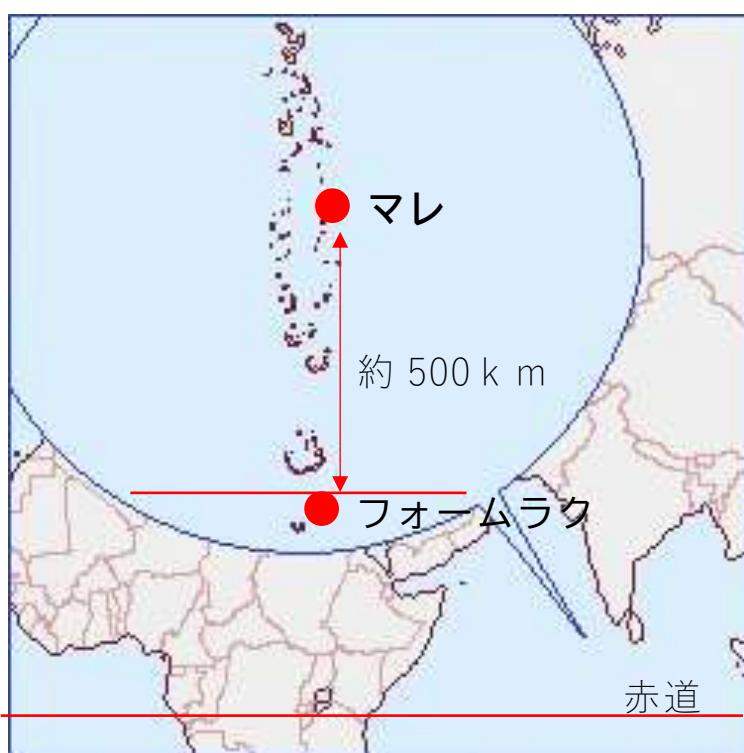
モルディブ共和国は、インド洋に浮かぶ 1,192 の島々、26 の環礁からなる島嶼国であり、全島を合計した面積は、約 300 平方キロメートルである。環礁は南北に長く分布し、北端から南端の島までは赤道を挟んで約 900km の距離がある。これは、伊豆大島から小笠原諸島父島の距離とほぼ同じである。

ア 時差

日本との時差は 4 時間であり、サマータイムはない。



(出典：Google Map <https://www.google.co.jp/maps/>)



(出典：外務省ホームページ <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/maldives/index.html>)

7. 訪問の概要

今回の訪問先は、モルディブ南部にあるフォームラク市（フォームラク島）、中部にある首都のマレ市（マレ島、ビリングギリ島、フルマーレ島）である。

7月23日（水）正午頃（日本時間では午後4時頃）、モルディブ共和国の玄関口である首都マレ市のヴェラナ国際空港（フルレ島）に到着した。モルディブと日本との時差は4時間で、日本時間の前日午後11時に出発し、シンガポールでの乗り継ぎを含めて17時間の移動時間であった。

この後、国内線に乗り換えて南部のフォームラク島まで行く行程であるが、次のフライトまで3時間半近くあるため、隣接するマレ島に移動し、昼食をとる予定となっている。

マレ市のヴェラナ国際空港（国内線を含む。）はフルレという空港島にあり、そこから西のマレ島と、北のフルマーレ島の3つの島は、中国資本で建設されたシナマーレと呼ばれる橋でつながっており、車で行き来できるようになっている。



（出典：Google Map <https://www.google.co.jp/maps/>）



マレ島とフルマーレ島をつなぐシナマーレ橋

ヴェラナ国際空港でモルディブ都市・地方自治・公共事業省のモハメド・アリ副大臣をはじめとする政府職員の歓迎を受けた後、隣の国内線でフォームラク行きの便のチェックイン手続きを先に行った後、送迎車に乗り込み、共に昼食会場に向かう。空港を出た途端、地面と海面がほとんど同じ高さにある景色が目に飛び込んできて、気候変動による海面上昇の危機というものをいきなり実感し、たびたび洪水に見舞われるという話にも納得がいった。



歩道とほぼ同じ高さの海面

モルディブは小さな島が多いため、車はそれほど走っていないだろうと想像していたのだが、空港からマレ島に至る道路では多くの車が行き交っており、マレ島内に入るとさらに車が増え、おびただしい数のスクーターがすり抜けるように走行していた。

10分ほどでマレ島内の昼食会場に着き、モハメド・アリ副大臣ら省庁職員及び在モルディブ日本国大使館の石神留美子大使ら大使館職員と対面。今回の視察に当たっての様々な調整への感謝を述べた後、独立記念式典などこれから動きを確認しつつ、モルディブでの生活の状況やマレ島とフォームラク島の違いなどを伺いながら会食した。



昼食会の様子



加藤市長の左がアリ副大臣、右が石神大使

午後2時過ぎにフォームラク行きの飛行機に乗るため、再びフルレ島の空港に戻る。フルレ島では、ヴェラナ国際空港の新ターミナルビルが建設され、3日後に迫った独立記念日のオープンに向けて準備が進められていたが、新ターミナルビル前の道路灯などはまだ完成しておらず、間に合うのか不安になるほどマイペースで作業をしている人々の姿が印象的で、南国でのんびりとしたムードを感じた。

午後3時25分、プロペラ機に乗ってヴェラナ国際空港国内線を離陸しフォームラクへと向かう。機内からモルディブの様々な環礁と島を臨みつつ、日本を出発して22時間後となる午後5時近くにフォームラクに到着した。



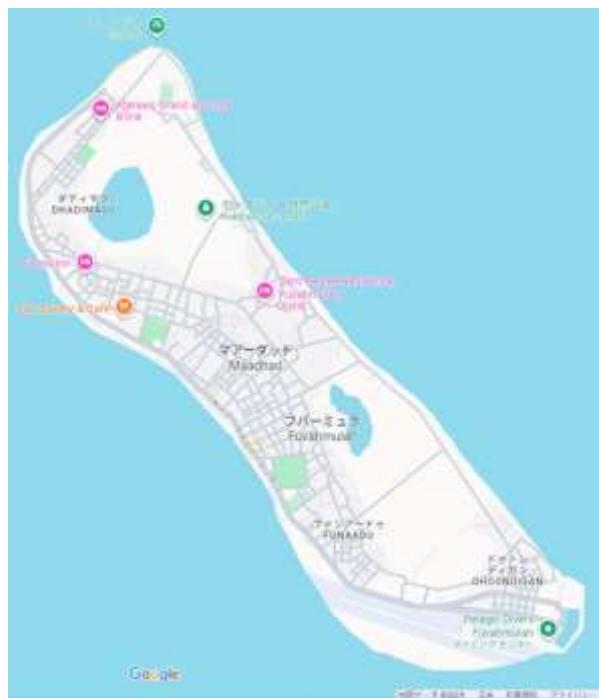
新ターミナルビル建設の様子



航空機内から見た環礁の様子

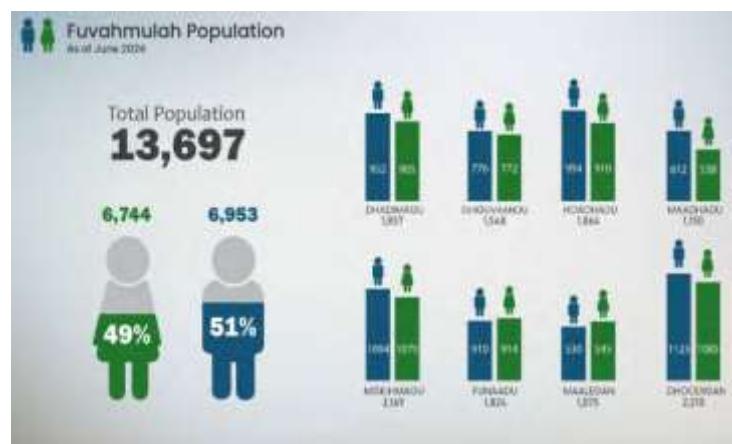
(1) フォームラク市

フォームラク市 (Fuvahmulah City)



フォームラク市地図（出典：Google Map <https://www.google.co.jp/maps/>）

フォームラク市は、首都マレから約 500km 離れたモルディブ南部、赤道直下のグナビヤニ環礁 (Gnaviyani Atoll) に位置する国内最大級 (4.95 平方キロメートル) の島で、モルディブで 3 番目に人口の多い約 1.4 万人（2024 年 6 月現在）の人々が暮らす都市である。2017 年の人口は約 1.2 万人であり、近年は年 2.38% の割合で人口が増加している。（開成町が面積 6.95 平方キロメートル、人口約 1.8 万人）



（フォームラク市プレゼン資料より）

フォームラク島は、一つの環礁に一つの島しかないワンアイランド環礁というモルディブの中でも唯一の環境にあり、島は火山性盆地で内陸部は森林、2つの淡水湖、緑豊かな湿地帯に覆われている。この独特的な地理的条件により、島を取り囲む海とサンゴ礁は、モルディブで最も生物多様性に富んだ海域の一つとなっている。環礁には、タイガーシャークと呼ばれるイタチザメやトラザメ、オナガザメ、ジンベイザメといった貴重な個体群や 1,200 種を超える魚類など、多様な生物が生息している。

また、島は渡り鳥の重要な中継地でもあり、固有種 5 種を含む 167 種以上の生物が生息している。島の地質は硬質サンゴと砂礫岩が特徴で、キリ (kilhi) と呼ばれる 2 つの水域（淡水湖）を持つ浅いボウル状になっており、キリは厚い泥炭層と泥に覆われた湿地に囲まれ、周囲にはヤシの木、樹木、低木が生育している。外縁のサンゴ礁と島の海岸の間にラグーンがないため、島は強い波の影響を受け、その結果、島の北端から広がる裾礁のエリアである「トウンドゥ」は、モルディブの他の場所では見られない独特の光沢のある小石のビーチが広がっている。



トウンドゥビーチ

こうした生物多様性と独自の生態系に加え、島には特有の文化や、古代遺跡といった歴史があり、モルディブの他の島々と一線を画している。2012年に2つのキリ（淡水湖）と北東部のトウンドゥビーチが自然保護区に指定されている。

モルディブ政府は、長らく外国人観光客の入島をリゾート島と首都マレに限定し、住民島への入島を認めていなかったため、住民島であるフォームラク島を訪れる外国人はいなかった。

しかし、2009年に方針転換がなされ、住民島への外国人観光客の受け入れが始まったことで、島内にはダイビングセンターや宿泊施設が増えている。

近年はダイビングの名所として観光にも取り組んでおり、2023年に観光客用サイト（<https://fuvahmulah.mv/>）を作成し、運営している。

首都マレからのアクセスは、ヴェラナ国際空港国内線からフォームラク空港までプロペラ機で約1時間半から2時間であり、1日2便の運行となっている。ほかにモルディブ最南端のアッドゥ環礁のガン国際空港まで国内線に乗り、そこから定期船のスピードボートで行く方法もあるが、さらに時間がかかる。

フォームラク市は2016年まで8つの島議会と環礁議会により運営されていたが、2017年に市議会として設立された。

議会は市長1名と6名の議員により構成されており、市長は直接選挙により選出され、議員は6つに分かれた地域より選出される。副市長は議員から互選される。

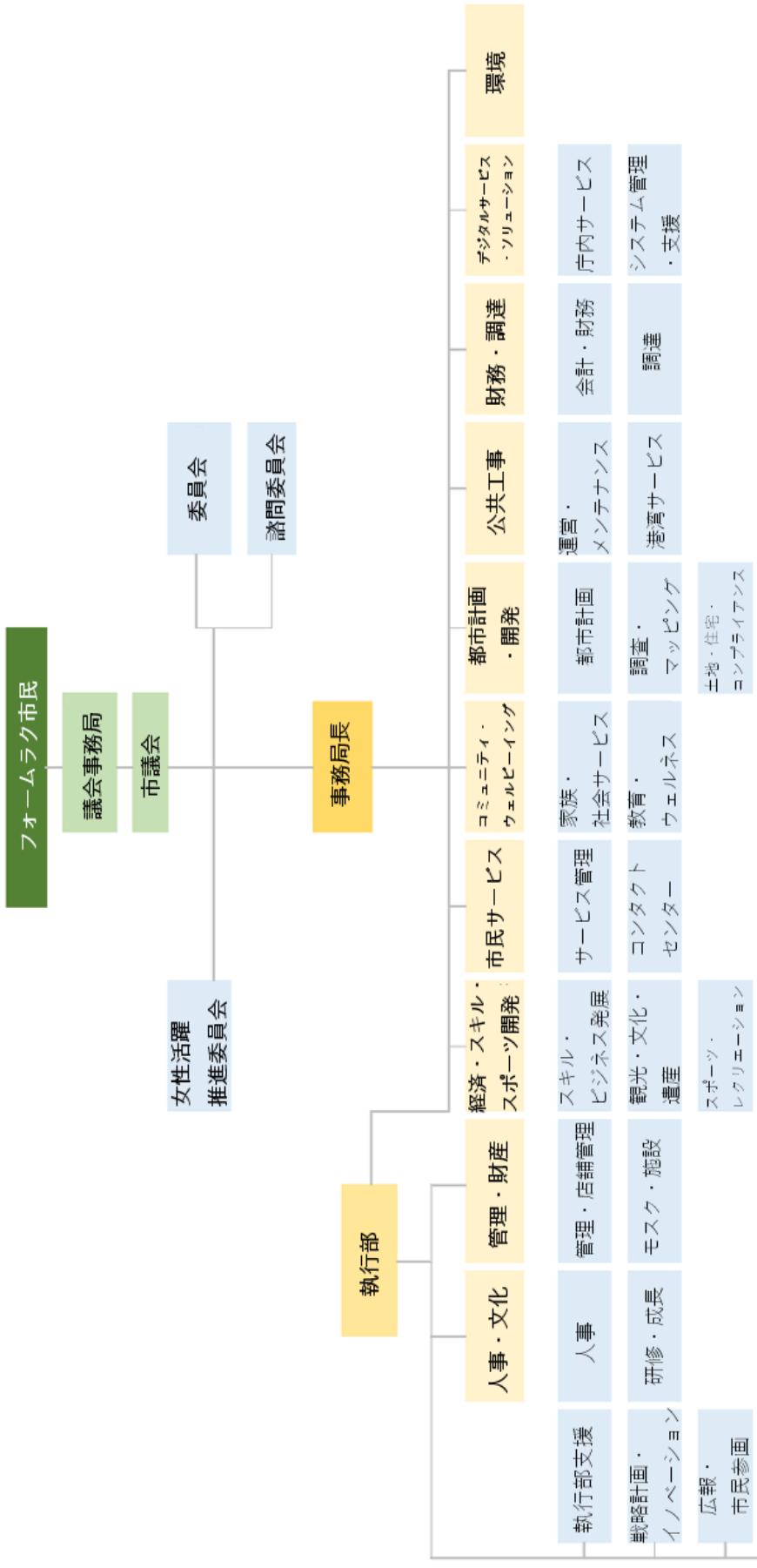
モルディブの行政は市議会が行政の執行機関を持っているとされ、日本でいう市議会（議決機関）と首長をはじめとする執行機関が一体となっている。そのため、市長は機構図において市議会に含まれる。

行政機構図は次ページのとおり

（フォームラク市ホームページを参考に作成

<https://fuvahmulah.gov.mv/en/council/secretariat/organizational-structure>）

フォームラク市の行政機構図



フォームラク市議会には以下の委員会が存在し、それぞれ 5 名の議員が委員となっている。

- ・計画・住宅・住み良い街委員会
- ・コミュニティサービス委員会
- ・財務・経済発展委員会
- ・スマートシティ委員会
- ・環境・気候変動委員会

フォームラク市は以下のビジョン、ミッション、価値観を掲げている。

○ビジョン (Vision)

市民に最も充実したサービスを提供する模範的な自治体となり、フォームラクを「住みやすく、緑豊かで、清潔で、安全なスマートシティ」へと発展させることを目指す。

○ミッション (Mission)

現代的な施設を通じて、市民に迅速かつ容易にサービスを提供し、財政的責任を果たしながら、島の伝統と誇りを守る。

また、信仰心があり、技能に優れ、経済的に豊かで、良好な社会環境を持ち、文化的に発展し、自立した市民社会の構築を目指す。

○基本的価値観 (Core Values)

- ・One Team (ワンチーム)

私たちは一つのチームとして、互いに思いやり、支え合い、信頼し、尊重し合いながら共に働く。

- ・Integrity (誠実)

私たちは倫理的であり、説明責任を果たし、誠実かつ公平に、常に正しい行動をとる。

- ・Excellence (卓越性)

私たちは、高い基準と革新への取り組みを通じて、あらゆる活動において最善を尽くす。

- ・Initiative (主体性)

私たちは主体的に行動し、自らの業務に責任を持って取り組む。

・ Passion (情熱)

私たちは情熱と熱意を持って働き、成功を分かち合い、仕事を楽しむ。

・ Caring (思いやり)

私たちは共感を持ち、地域社会と同僚を大切にする。

空港では、イスマイル・ラフィーク市長のほか、フォームラク市職員や市民の皆さん 10 数名が列を成して温かく迎えてくださり、そのまま空港の敷地内的一角に並べられた椅子に案内され、振る舞われたココナッツジュースをいただきながら、初対面のご挨拶と手厚い歓迎に対する感謝を申し上げた。



飛行機まで出迎えていただいたイスマイル市長ら

空港脇でフォームラク市の皆さんと懇談



フォームラク市の温かい歓迎（写真中央がイスマイル市長）

その後、島の中部にある宿泊先のホテルまで送迎していただき、夜の歓迎夕食会までの間、ホテルの屋上から島全体を見渡したり、周辺を散策したりした。ホテルの部屋には飲料水が用意されていたが、ペットボトルではなくガラス製のリターナブル瓶が使用されており、環境への配慮が感じられた。また、お風呂にはバスタブではなく、シャワーのみであった。トイレは、事前に調べた情報では排水処理の関係でトイレットペーパーを流せない施設もあり、代わりに洗浄用のシャワーが設置されているとのことだったが、この島では下水処理施設が整備されているため、トイレットペーパーを問題なく使うことができるようになっていた(洗浄用のシャワーも付いていた)。

屋上から島の風景を撮影している時、島全体に響き渡るほどの大音量で、アザーンというイスラム教のお祈りが流れてきた。小田原市の防災無線のような鉄塔がいくつか見えるが、そこから流しているらしい。アザーンは、サラート(礼拝)のタイミングで1日5回流れ、その約15分間はスーパーや銀行などがクローズするそうである。



ホテルの屋上から



山や丘などはなく平坦な島



下水処理施設



飲料水はペットボトルではなく瓶で提供

夜8時前に、市職員の送迎で夕食会場に向かう。ほとんど街灯がない暗く静かな道を走り、真っ暗なビーチに到着。浜辺の方に松明が点々と灯されており進んでいくと、このために特別に設置された歓迎のアーチやウェルカムボード、テーブルが並べられていた。多くの市職員とシェフに迎えられる中、小田原市長からフォームラク市の皆さんに対し、招待いただいたことへの感謝と、今回の視察への期待や気候変動問題の共有、両市の今後について挨拶をさせていただいた。



ウェルカムボードと共に



小田原市長からの挨拶



ビーチの一角に用意された夕食会場



郷土料理が振舞われた

食卓には、数多くのモルディブ料理が並べられ、我々日本人のためにモルディブ人が普段は食べない刺身まで用意してくれていた。

海に囲まれたモルディブでは、当然のことながら魚食が中心であり、国民一人当たりの年間水産物消費量は、日本が 24.6 kg に対し、モルディブは 142kg (FAO, 2019) で世界最高水準である。中でもカツオの消費量が圧倒的に多く、カレーやスープ、揚げ物、練り物などカツオを使った様々な料理がある。ただし、魚以外の自給率は低く、野菜やフルーツ、スパイス、卵、乳製品など多くの生鮮食品が

近隣諸国であるスリランカやインドなどから運ばれてきている。味付けは辛味のあるものが多いが、おおむね日本人の嗜好に合うものとなっている。ツナとココナッツのフレークに、刻んだ玉ねぎ、唐辛子などを混ぜた「マスフニ」（ディベヒ語で「魚」を「マス」、「ココナッツ」を「フニ」と言う）というのがモルディブの定番料理で、小麦粉をクレープ生地のように薄く伸ばして焼いた「ロシ」に包んで食べるのが一般的のようである。



マスフニ



ロシ

ちなみにイスラム国家であるモルディブでは、リゾート島のホテルを除き、飲酒や豚肉の摂取は禁止されている。飲食店での提供やスーパーなどでも販売されていないため、イスラム教徒でない外国人観光客も住民島にいる間はお酒を飲んだり、豚肉を食べたりすることはできない。

夕食会は、波の音を BGM に終始和やかな雰囲気の中で催され、最後に小田原市からの手土産をお渡しし、翌日の視察のご案内をお願いしてホテルに戻った。

■フォームラク市長らとの意見交換（フォームラク市庁舎にて）

7月24日（木）は、フォームラク市長らとの意見交換や市内視察を行った。

午前8時半過ぎ、宿泊先のホテルを徒歩で出発。5分ほどで島の中心部にある市庁舎へ到着。ここでも多くの職員の出迎えがあり、今後的小田原市との交流に向けたフォームラク市の期待の高さが伺えた。

市庁舎は2階建ての建物となっており、まず2階の市長室に案内され、名刺交換するとともに、来庁を記念するノートに小田原市長として、訪問に対するメッ

セージを記帳した。

その後、会議室にてフォームラク市のイスマイル・ラフィーク市長ほか6名の市議会議員らと意見交換を行った。



フォームラク市職員のお出迎え



フォームラク市庁舎



訪問を記念したメッセージを記帳



意見交換の様子

冒頭イスマイル市長から、モルディブそしてフォームラク市へ訪問していただいたことに対するお礼の言葉があり、引き続き、フォームラク市の紹介動画を視聴した。

その後の意見交換では、イスマイル市長から次のような話があった。

- フォームラク市は、モルディブで最も美しい島とされている。一方、様々な課題を抱えており、特に環境問題に直面している。
- ゼロカーボンの目標に向けた取り組みとして太陽光発電を導入しており、市

庁舎の屋根にも設置している。

- 地球温暖化の影響により、海面上昇の危機にあり、その状況については後ほど現地をお見せする。豪雨の際は洪水が起きるため、早期警戒システムを用いて市民の安全を守っている。
- 持続可能な環境への対応として、コンポスト器の導入を進めている。
- 今後の交流について議論していくことは大変素晴らしいことである。文化や食事、生活、漁業、農業などたくさんの学びがあると思う。フォームラク島はユネスコエコパーク（生物圏保護区）にも登録されている。
- フォームラクの文化や漁業などを知ってもらい、ダイビングなどの観光プロモーションを日本や小田原で行いたいと考えている。
- フォームラク市が直面している課題や経験を共有できることは大変うれしい。将来的には、姉妹都市になることができればと考えている。
- 交流に当たっては、外務省など中央政府に支援していただけだと考えている。今回の訪問が、小田原との長期的な関係の最初の一歩となることを期待している。私たちの関係が長く続き、相互に発展することを望んでいる。

次に、小田原市長からは、次のような話をさせていただいた。

- フォームラクは想像以上に緑が豊かで、平和で静かな街であることに感銘を受けている。
- 環境問題に关心を持っており、世界で起きている気候変動の影響が日本や小田原にも及んでいることを認識している。
- 台風が年々激しくなり、雨の降り方が変化しており、小田原でもたびたび土砂災害が発生している。気温上昇により、米の生産量が減少し、野菜の種類を変更しなければならないなど、農業にも影響が出ている。また、小田原は漁業が盛んであるが、昔取っていた魚が取れなくなったり、逆に別の魚が取れるようになったりしている。
- 東日本大震災と原発事故があったことをきっかけとして、小田原では再生可能エネルギーを推進しており、太陽光発電によって地域の中で自給自足するシステムを構築するなど、日本の中でも先進的に取り組んでいる。最近増えているのは、農地の上に太陽光パネルを乗せて、農作物の収入と売電収入を

得るもので、農家を支えながら、街として電力も得ている。

- 地球環境の変化や東日本大震災など、私たちの生活を取り巻く環境の変化があり、気候変動の問題は、もっと真剣に取り組まなければならないと考えているが、日本では気候変動問題を「自分事」として捉える意識が難しい状況にある。
- 気候変動の影響により、モルディブの島が沈んでいくという大変過酷な状況にあることを知ることで、小田原市民が気候変動を「自分事」として感じる必要があると考えている。
- 人は誰でも家族や友人が重い病気にかかったり、深刻な状況に陥ったりしていたら何とかしたいと思うのと同じで、モルディブの皆さんと強い絆を持ち、痛みを共有することで、気候変動への取り組みを行動につなげる契機にしたい。
- フォームラクの皆さんが直面している課題やそれにチャレンジしている内容を共有し、また小田原の取り組みも共有することで、この局面を乗り越えていければと考えている。
- 今回、モルディブ、フォームラク市を訪問した理由は大きく3つある。一つ目は、ご招待いただいた独立60周年記念式典へ参加すること。二つ目は、フォームラク市から姉妹都市の提案を受けて、現地の気候変動による影響や状況を確認し、その痛みを知ることで、小田原の気候変動の取り組みを進めることにつなげたいこと。三つ目は、海、森、農作物、そして優しい人々がいる平和なフォームラクを小田原の子供たちが訪れ、交流することで、人にとっての幸せや本当の豊かさとは何かを学ぶことができるのではないかということ。
- 今後、イスマイル市長や島の方々と議論を深め、今後の連携や交流について具体的な方向性を描いていきたいと考えている。

終始和やかな雰囲気の中、45分にわたる意見交換を行ったのち、最後に双方で記念品を交換。フォームラク市からは島をかたどった置物をいただくとともに、小田原市からは寄木の長角盆をお渡しさせていただいた。



島をかたどった記念品をいただいた



小田原市からは寄木の長角盆をお渡しした

意見交換後は、イスマイル市長と職員の方々の案内で、沿岸保護区域や港、廃棄物処理施設、自然公園、G Nアトール教育センターなどを視察した。

■沿岸保護区域

海岸侵食は、フォームラク市が直面している最も深刻な環境問題の一つとなっている。侵食による海岸線の後退は過去47年間（1969年～2016年）で平均年間0.8mに及び、島から約15ヘクタールの土地が失われたと推測されている。このため、重要な建物、施設、ヤシの木が、侵食する海岸線の境界に位置する状況になっている。フォームラク島は沿岸部に隆起した尾根があり、島の洪水を防ぐ自然の保護機能を果たしているが、島の北東部の尾根の侵食によって、この尾根の構造的な一体性が脅かされている。この尾根が崩壊すると、島の広い範囲で深刻な洪水が発生し、人々の生活や生態系、農産物、インフラに影響を及ぼすことから、島の住民はこの深刻なリスクについて大きな懸念を抱いているそうである。

下の 2 つの航空写真（1969 年、2020 年）からも砂浜の浸食が見て取れる。（枠内が特に著しい箇所）



出典：フォームラク市報告書より <https://fuvahmulah.gov.mv/files/FVM-Report.pdf>



出典：フォームラク市報告書より <https://fuvahmulah.gov.mv/files/FVM-Report.pdf>

実際に海岸に出てみると、砂浜から 1 段上がった部分にヤシの木などが立っているが、その根はむき出しとなり、中には横倒しになった状態から上方に伸びている木もあった。



海岸浸食の影響により、横に倒れてしまったヤシの木



浸食により根が露出しているヤシの木

そこで、モルディブ国家計画・住宅・インフラ省は「Gn. フォームラク沿岸保護」プロジェクトを立ち上げ、2021年から2025年まで島の東側沿岸2.6kmにわたりオランダの企業によって護岸が建設された。なお、フォームラク島はモルディブの他の島と違い、ラグーン（サンゴ礁に囲まれた浅い水域）がなく、直接強い波の影響を受ける地形のため、護岸の内側に人工の海水浴場が造られ、安全に海水浴ができるようになっている。



護岸整備された海岸線



海岸線に立ち、状況を確認

■ 港

港は島の南東部にあり、一つの港内に漁船のほか、スキューバダイビング用の船や生活物資の運搬船が停泊している。

フォームラク島は、タイガーシャークという人食い鮫を間近に見ることができるとしてダイバーの間では有名で、それを目当てに訪れる観光客も多く、港に着いた時にちょうどダイバーを運ぶ専用船が戻ってきたところであった。

港前の魚市場は開いていなかったが、漁師さんたちがカツオと思われる魚を豪快にさばいていた。

また、生活物資の運搬船が数日かけて首都マレから食料や日用品を運んできており、港に停泊し大量の荷物を運び出していた。

このように島にとっての港は、観光、漁業、生活に不可欠な存在で、島民にとっての生命線であり、重要なインフラとなっている。

港の外側には数メートルの高さの護岸が整備されているものの、常時強い波が打ち付けており、頻繁に波しぶきが港内に飛んできていた。台風が来た時は、かなり危険な状態になるだろうと感じた。



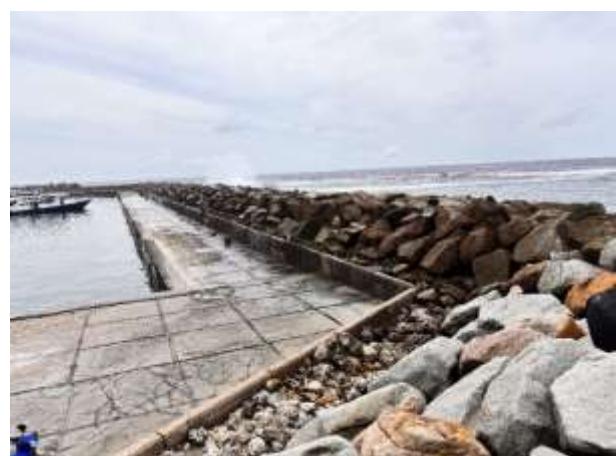
船着き場



港に停泊する物資運搬船



魚を捌く漁師



防波堤に打ち付ける波



ディベヒ語で書かれた港の案内板



地元漁師の方と

■廃棄物処理施設

廃棄物管理は、モルディブの最大の課題の一つとされている。小さな島の集合体であるモルディブでは各島に焼却施設がなく、廃棄物は野焼きや海洋投棄により処理されていたが、人口増加に伴ってマレ島の西方 6 km の位置にあるティラフシ島に運搬され、堆積されてきた。ティラフシ島は「ごみの島」と呼ばれ、焼却施設がなく、日々運搬される廃棄物の山からは自然発火が起き、周辺の海域にも臭気が流れて問題となっていた。



分別されていないフォームラクのごみ

そこで、廃棄物処理を所管する環境エネルギー省は、2000 年代になって国をいくつかのゾーンに区分し、ゾーン内の島嶼の廃棄物を集中して管理、処理する地域集中廃棄物管理センターを設置し、ゾーン内の住民島ごとに家庭や事業所からの廃棄物を回収する計画を策定した。

現在は、WAMCO (Waste Management Corporation Ltd) と呼ばれる政府 100% 出資の廃棄物管理会社が各ゾーンに置かれ、廃棄物処理業務を行っている。WAMCO が業務を開始する前は、民間の回収人が家庭や事業所を訪問して廃棄物を回収していたが、現在は 1 世帯あたり月額 100~150 ルフィア (約 1,000~1,500 円) の費用を徴収して WAMCO が回収している。回収した廃棄物は、廃棄物管理センターに運ばれ、分別され、生ごみは堆肥化される。

2023 年には、日本政府が政府開発援助 (ODA) の一環として、草の根・人間の安全保障無償資金協力 (GGP) による「フォームラク島における堆肥化機械整備計画」

³⁰の贈与計画をフォームラク市議会と締結し、約10万米ドルの無償資金を供与しており、これにより有機廃棄物を堆肥化し、土壤を農業や家庭菜園に提供することで輸入土壤への依存を軽減することに寄与している。

しかしながら、フォームラク市の廃棄物管理センターには焼却施設がないため、生ごみ以外の廃棄物は堆積されており、「ごみの島」であるティラフシ島は遠距離で費用と時間がかかるためほとんど運搬されず、14年分の廃棄物が積み上がっていいる状態であった。視察している間も、担当者が堆積された廃棄物の山から少しづつ分別作業を行っていたが、回収する段階で分別されていないため、そこから分別することはほぼ不可能に思われた。

小田原市では、家庭で9分別18品目に分別したものを回収していることを伝えると、WAMCOの担当者は驚いた表情で「ぜひそのノウハウを勉強したい」との返事が返ってきた。ただ、仮に分別回収がなされたとしても、分別後の処理体制が確立されていなければ無意味であることから、焼却施設の設置計画をはじめとして廃棄物全般の処理についての抜本的対策が必要と思われる。



野ざらし状態のごみ



小田原市の分別方法に興味を示すWAMCOの担当者

³⁰ 在モルディブ日本国大使館、書簡交換式：ニヤビヤニ環礁フォームラク島有機廃棄物処理機材整備計画 <https://www.mv.emb-japan.go.jp/itpr_ja/11_000001_00518.html> 参照 2025-11-21

余談だが、住民島での廃棄物処理には課題がある一方で、リゾート島においては廃棄物処理に関する国の厳しい規制によって適正な処理が義務付けられており、リゾート島を訪れる国外の観光客に対して美しい南国の楽園というイメージを裏切らない対策が講じられている。いくつかのリゾート島では、飲料水や電気、食材を自給し、廃棄物、下水処理も島内でクリーンに処理する持続可能な自給自足を実現しており、同じ国の中でも大きな対応の差があると感じた。

なお、前述のティラフシ島では現在、日本企業により焼却・発電する廃棄物処理施設を建設中で、その他の住民島においても焼却施設が整備され始めており、課題解決に向けた取り組みが着実に進められている状況のようである。

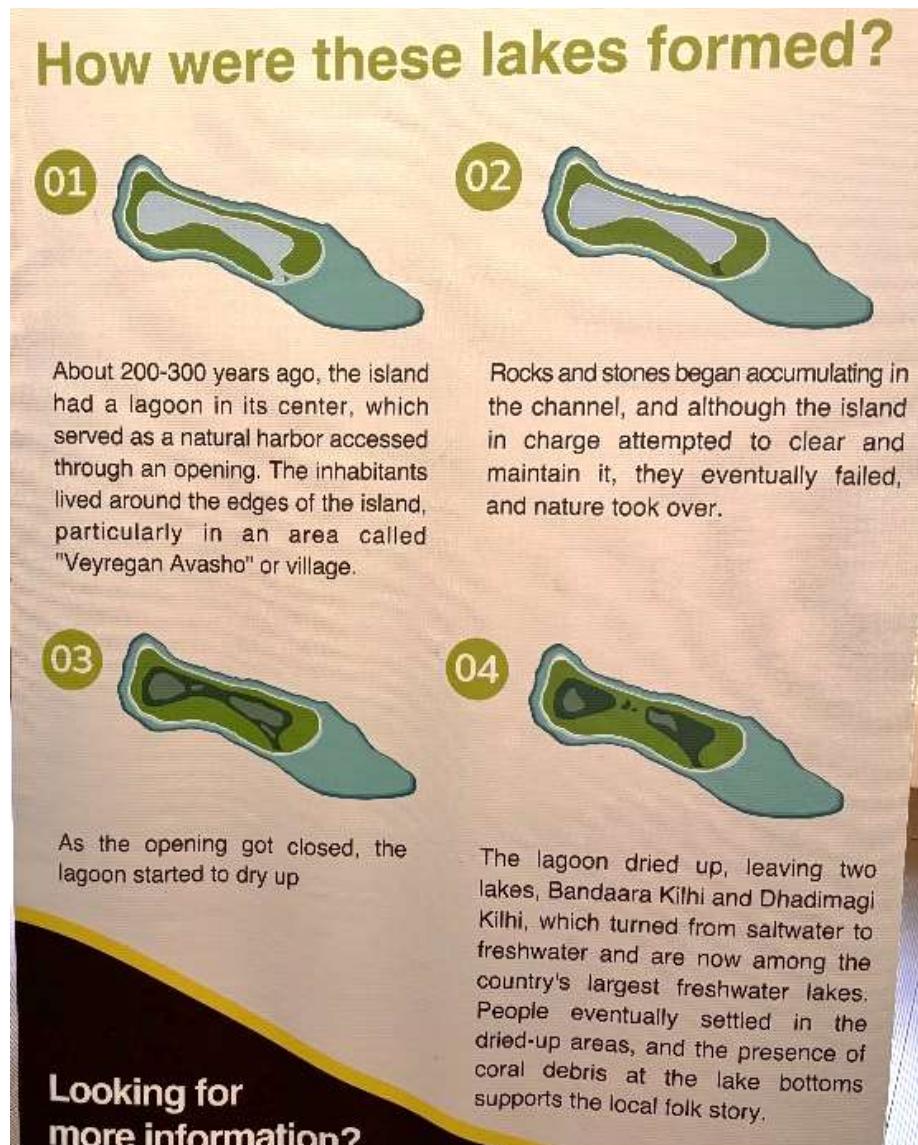


14年分のごみの山

■自然公園

フォームラク自然公園 (Fuvahmulah Nature Park) は、泥地とマングローブ林を保護するために、欧州連合の資金援助を受けた気候変動適応プロジェクトの一環として、2017 年に設立された。島の北部にあるダディマギ・キリ (Dhadimagi Kilhi) と中央部にあるバンダーラ・キリ (Bandaara Kilhi) の 2 つの大きな淡水湖周辺の沼地と湿地帯からなるエコツーリズム公園であり、島の面積の約 3 割を占めている。

約 200~300 年前、島の中央部にはラグーンがあり、南東部が海との開口部になっていた。その後、開口部に岩石が堆積しラグーンは海から分断され、ラグーン内部が乾燥し始めるようになり、やがて 2 つの湖に分かれて淡水化し、その周辺が湿地帯と陸地となった。この二つの湖はモルディブ国内で唯一の淡水湖である。



フォームラク自然公園の展示

ダディマギ・キリは、面積 6.37 ヘクタールで、二つある湖のうち、小さい方の湖を含む自然公園で、水深は平均 1.2m と浅く、事務所やレクリエーションエリアがある。バンダーラ・キリは面積 5.8 ヘクタール、水深は平均 3.6m とやや深い。

公園内には自然があふれ、湿地帯や湖が広がっており、カヌーやペダルボートなどのアクティビティを楽しむことができるようになっていた。

また、公園内を探索し、固有の鳥、蝶、その他の野生生物を観察することができ、常駐のスタッフによるガイド付きツアーも実施されている。ガイドの中には日本の大学（おそらく筑波大学）に 3 年間留学していた女性もおり、親しみを持って接していただいた。

自然公園の湿地の端には、フォームラクの主食であるタロイモの畑が広がっており、島内で消費されているそうである。



広がる湿地帯



湿地帯に架かる桟橋



モルディブ国内唯一の淡水湖



湿地の端に広がるタロイモ畑



自然公園内のヤシの苗の記念植樹

■GNアトール教育センターの高校生との意見交換 (Gn. Atoll Education Centre)³¹

GNアトール教育センターは、日本的小中高一貫校に相当する公立学校で、島の中央部に位置している。創立は1982年、当初は初等教育（1年生から5年生）でスタート、3年後には中等教育の6、7年生が、さらに5年後の1990年には中等教育の8年生から10年生が開設されてきた。そして、2004年から高等教育（11年生、12年生）が開設されている。

現在の生徒数は343人で、ここ数年は全国レベルの試験で優秀な成績を収める生徒を多数輩出しているそうである。

授業で使用する言語はディベヒ語が主であるが、英語やイスラム教育もカリキュラムに含まれており、日常的に英語が使用されている。また、コロナウイルス（Covid-19）パンデミックを契機に、オンライン授業や学校管理のためのデジタルシステムの活用も進んでいる。

³¹ GNアトール教育センター About Us <<https://www.gnaec.edu.mv/a/our-profile>>

参照2025-11-10

この日、GN アトール教育センターは休校日であったにも関わらず、校長先生をはじめ科学・環境クラブ (SEP:Science and Environmental Pioneers) の生徒さんと顧問の先生が小田原市のために出迎えてくれた。



生徒の皆さんによる出迎え



校舎

科学・環境クラブの活動は 2004 年に始まり、7 年生から 12 年生までがメンバーで、「科学を通じてより良い持続可能な未来を形作る力を若者の心に与える」ことをビジョンとし、科学実験や調査研究、フィールド旅行、科学フェアの開催、地域コミュニティへの参加、NGO や他校との協働、ゲストスピーカーによる講演などの多岐にわたる活動を行っている。

調査研究では、島内のビーチの傾斜がどう変化しているかや、水質に問題がないかなどの調査を行い、科学フェアでは、好奇心を育み持続可能な取り組みを行うことを目的に、ペットボトルのキャップを活用したワークショップや NGO、ダイビングセンターとコラボした体験をしているとのことである。

この日は、高等教育 (11 年生、12 年生) のメンバー 10 名と顧問の先生に対応していただいたが、皆さんとても素直で真面目な印象であり、こちらの質問にも一生懸命答えてくれた。生徒からは「モルディブでは気候変動の影響で海岸侵食が問題となっているので、科学の力で解決できるように勉強していきたい」、「ここで学んだことを活かして、将来は環境系のエンジニアになりたい」、「日本は資金も技術力もある国なので、友情を育んで気候変動などの共通の課題を解決するために協力していきたい」といった意見や抱負があった。また、「今後、フォームラク市と小田原市の間で若い人たちが交流をするとしたら、ぜひ参加したい。ホストファミリーとしても受け入れたい」との前向きな意見があった。

最後に、生徒さんからヤシの木や皮で作ったという手作りのオブジェを記念に

いただいた。地元高校生との意見交換は、今後のフォームラク市との交流を考える上で、極めて重要な機会となった。



意見交換の様子



明るい笑顔が印象的であった



発言をする高校生たち



科学・環境クラブの活動をプレゼン



ヤシでできた記念品を頂く



みなハツラツとしていた

GN アトール教育センターの観察後は、自然公園のバンダーラ・キリ (Bandaara Kihli) にあるオープンカフェで昼食を取った後、午後 2 時に一旦ホテルに戻り、漁業体験のため港に向かった。

■漁業体験

港に停泊していた小さな漁船に乗り込み、2人の漁師さんの操縦でイスマイル市長と出港した。フォームラク島はラグーンや湾がないため、港を出るといきなりインド洋の大平原である。大波のうねりで漁船が前後左右に大きく揺れる中、どんどん南下していき、数 km ほど進んだところから漁の仕掛けが始まった。

漁船の両脇から張り出した 2 ~ 3 m 長の竿の先端に数メートルおきに疑似餌を付けたテグスを通して、漁船を走らせながら複数の魚を釣り上げる引き縄漁法である。この漁法を現地ではトロール (Troll) と呼んでいるらしいが、今回は午後からの出漁（通常は早朝に出漁）で魚の動きが鈍いらしく、釣果はシイラ 1 匹であった。途中、何度も海上にジャンプしながら船を取り囲むように並走するイルカの群れに遭遇することができた。



船着き場



漁船に乗せていただきインド洋へ



魚を引き上げる様子



漁船から見た島の様子

下船後は、イスマイル市長のお招きを受け、ご自宅に立ち寄らせていただいた。庭には、いくつもの樹木が植えられ果実が実っている。平屋の住居へは日本と同じように靴を脱いで上がり、板張りの床に裸足で生活するスタイルである。エアコンは設置されていないようであったが、室内は暑さを感じない。

ご家族の歓待を受け、ダイニングキッチンに案内される。ダイニングテーブルには、令夫人手作りのヘディカと呼ばれる具材を包んで油で揚げたスナックや、伊達巻のような魚のすり身とココナッツを混ぜた練り物などモルディブの代表的な郷土料理が何種類も食卓に並べられ、紅茶と手作りのスイカジュースとともに美味しいいただきながら、歓談した。市役所職員の勤務時間は朝8時過ぎから午後2時までというお話をうかがい、ワークライフバランスがとてもうらやましく感じられた。



イスマイル市長ご自宅への招待



食卓に並ぶ郷土料理

裏庭に出てみると、パッションフルーツやマンゴーが植えられており、家の壁の一部にもイスマイル市長が DIY で補修したというサンゴが埋められており、南国らしい暮らしぶりが感じられた。



家庭にあるジョーリ（ベンチ）



庭に植えられた果樹

視察で島内を移動している中で、いくつか気付いた点がある。

まず、島内には信号が一つもなく、代わりにバンプ（自動車の速度を抑制するために道路などに設けられたカマボコ状の突起）が横断歩道や交差点の手前に設置されており、そこで必ず停止に近い状態までスピードを落とすようになっていた。法定走行速度が時速 30km 以下に制限されていることもあり歩行者が危険を感じることなく、また車両の数が少ないので渋滞している光景を見ることがなかった。これらは、狭い島内で人口も車両数も多くないからこそ成り立っているのかもしれないが、日本でも幹線道路以外の道ではこのような措置を取ることも有効かもしれないと思った。



減速してバンプを通過する日本製のトラック

スクーターに乗っている人も多くみかけたが、ヘルメットを被っている人はなく、2人乗りをしているスクーターも多く見かけた。中には小さな子どもを膝の上に乗せ、片手で抱きかかえながら走る母親の姿もあった。

さらに、島内には電線や電柱が見当たらず、すべて地中化されていた。



電線地中化工事の様子

島の電力は FENAKA という国営の公益事業会社によって供給されており、5.8MW の発電容量を備えている。主要電源はディーゼル発電であるが、燃料となる重油は国外から輸入しているため、再生可能エネルギーへの転換を少しづつ進めているところであり、空港の敷地内には多くの太陽光パネルが設置されていた。空港

内の太陽光発電容量は約 2 MW ということであり、ほかにも島内のいくつもの建物の屋根にソーラーパネルが載せられ、発電容量に占める再生可能エネルギーの割合は 3 割を超えていている。

また、FENAKA は電力だけでなく水道供給、下水処理も行っており、島の逆浸透装置により淡水を供給し、真空下水システムにより浄化して海洋放出している。



空港の敷地に設置されたソーラーパネル

■オーセンティックセンター (Authentic Fuvahmulah)

夜 8 時からは、宿泊先のホテルのすぐ近くにあるオーセンティックセンターに伺った。オーセンティックセンターは、フォームラクの特産品などを取りそろえた公式 PR ショップのようなもので、近年の観光客の増加に伴い、島のお土産を購入できる場所として市の中心部に作られている。視察した時点ではまだ開業しておらず、翌週のオープンを目指し準備を進めているところであった。

特産品と言っても、よくあるクッキーの詰め合わせのような、いわゆるお土産品ではなく、フォームラクで作られた装飾品や衣料品、雑貨、加工食品などがセンス良く並べられ、地産のものだけを取り扱っている。ここでは、障がい者施設で作られた品物も扱っており、作られた製品の由来やストーリーについて学び、共有することで職人を支援する場としての機能も求められており、スタッフがその役割を担うことになっている。



オーセンティックセンター外観



店内の様子



たくさんのフォームラクギフト



洗練された店内

小田原にも TAKUMI 館や WAZA 屋など地産の木製品を扱う専門店があるが、(行政が実施するかは別として) オールジャンルの地産製品を集めたオーセンティックセンターのように、工芸品から加工食品まで幅広い地産製品を一堂に取りそろえた場があると良いのかもしれないと思った。

夜 9 時過ぎとなり、島滞在中の短い期間に、温かくホスピタリティあふれる対応をしていただいた職員の皆さんへ、感謝の言葉とお別れのご挨拶をしてホテルに戻った。



フォームラク市の皆さんと最後の記念撮影

フォームラク市では、正味二日間足らずの短い時間であったが、島内各所の視察や交流がとても周到に準備され、また小田原市との交流に強い意欲を示しているイスマイル市長を中心に温かな受け入れと和やかで率直な意見交換、今後に向けての連携の意義などがしっかり確認でき、実り多き滞在となった。フォームラク市とは何らかの形で交流ができるよう、これから検討を行っていきたいと考える。

翌7月25日（金）は、夜明け前に出発するプロペラ機で首都マレへ移動する。午前3時、荷物だけを先に飛行機に積み込むためスーツケースを預けた後、午前4時過ぎに迎えに来てくれたイスマイル市長らと空港へ。夜明け前の真っ暗な中、皆さんに最後の別れを告げて、フォームラク島を出発した。



早朝、首都マレへの飛行機に乗り込む



機内から

途中カーデッドゥ空港で給油した後、午前 7 時頃にマレ市のフルレ島にあるヴェラナ国際空港に到着。空港では、独立記念式典に来賓として招かれるインドのモディ首相が午前 8 時過ぎに到着するとのことで、歓迎に向けた準備が慌ただしく行われ、厳重な警備体制が敷かれていた。



VIPを迎える準備をするヴェラナ国際空港



街なかには歓迎のサインも



インドのモディ首相を歓迎するゲート

空港で荷物を受け取り、モルディブ政府が用意した車両でマレ島にあるホテルへ。この日は今回の行程における移動日であり、石神在モルディブ日本国大使らとの昼食会まで時間があったため、朝食を済ませて 9 時頃から約 2 時間、島内を徒歩にて視察した。

(2) マレ市

マレ市 (Male City)³²

マレ市はモルディブ共和国の首都であり、カーフ環礁 (Kaafu Atoll) の真ん中にある北マレ環礁 (North Male Atoll) の南端に位置し、マレ島を中心に、周辺のビリンギリ島、人工島フルマーレ島、空港島フルレ島とともにマレ市を構成している。マレ島、フルレ島、フルマーレ島は 2018 年 11 月に橋が架けられ車で移動できるようになった。そのほか、マレ島と隣接するビリンギリ島、グリフアル島、ティラフシ島を結ぶ全長 6.74km の橋と道路を建設するグレーター・マレ・コネクティビティ・プロジェクト (GMCP) という計画がある。GMCP は、2022 年 8 月に工事を開始し、マレ島からビリンギリ島までのフェーズ 1 工事が 2023 年完工、全体工事は 2026 年完工を計画していたが、現在フェーズ 1 工事は橋脚の建設中であり、全体の完工も遅れるものと思われる。

人口は約 25 万人で国民の 4 割以上が首都マレに住んでおり、今も人口が増え続けている。

○マレ市の行政

- ・人口 252,768 人
- ・世帯数 46,251 世帯
- ・面積 6.35 km²

マレ市では市長のほか、18 の選挙区から 18 名の議員が選出される。

マレ市は以下のビジョン、ミッションを掲げている。

○ビジョン (Vision)

マレは、安全で安心して暮らせる、清潔で環境にも優しい都市となり、経済的な成長やインフラの発展に向けた十分な機会を提供する場所となることを目指す。

○ミッション (Mission)

マレを、持続可能な開発と進歩、快適な暮らし、そして住民が協力し合い、調和の取れた健康的なコミュニティが育まれるモデル都市にすること。住民たちは、緑豊かで清潔、安全な地域社会を大切にし、都市運営は、良い統

³² モルディブ国海上輸送に係る情報収集・確認調査報告書

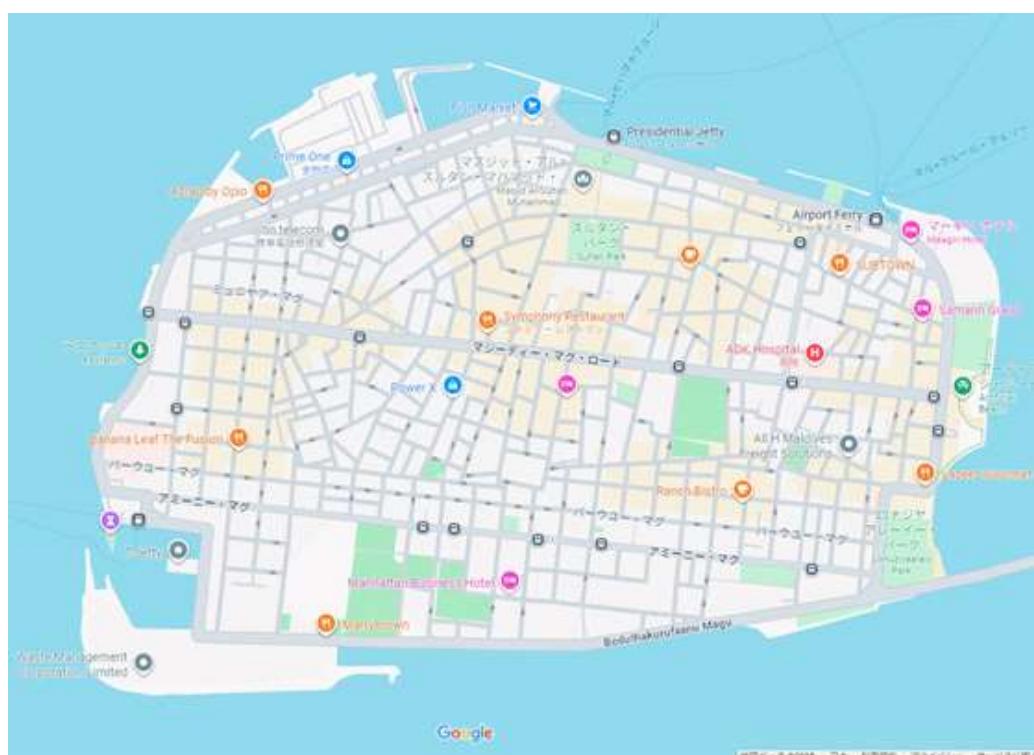
独立行政法人国際協力機構 (JICA)、パシフィックコンサルタンツ株式会社、株式会社パデコ 2024.8

治、透明性、協議、包括性を重視する効率的で効果的な市議会によって行われる。

ア マレ島 (Male)

マレ島は、首都マレ市の中心島であり、モルディブの政治・経済の中心地で、貿易港でもある。東西に約 2.5km、南北に約 1.5km の面積 1.8 平方キロメートルの島の陸地全体が都市化され、モルディブの人口の 1/3 から 1/4 にあたる約 14 万人が集中し、多くの外国人労働者も居住しており、世界で最も人口過密な都市の一つとして知られている。人口密度は 1 平方キロメートルあたり 10 万人を超えており、東京 23 区の 6.6 倍に相当する。

増大する住宅需要を満たすため、1997 年から人工島フルマーレが造成されている。



マレ島地図（出典：Google Map <https://www.google.co.jp/maps/>）

マレ島は人口密度が高いこともあり、平屋や 2 階建ての建物は見当たらず、中層の建築物が密集している。通路は一方通行か両側 1 車線ずつの狭い道が多く、自動車やスクーターが頻繁に行き交う中、歩行者が縦横無尽に横断していく。小

田原市内で例えると、おしゃれ横丁や錦通り、ダイヤ街のような通りが島中に張り巡らされている感じで、通路脇にはどこもスクーターがびっしりと駐輪されている。

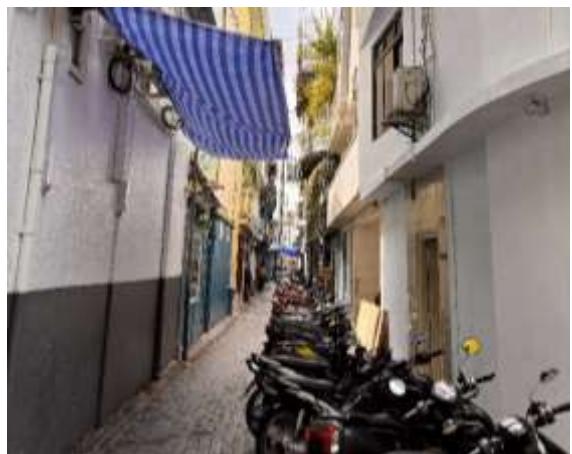
フォームラク島と同様この島にも信号がない。交通量が物凄く多いのでとても危険に感じるのだが、制限速度が時速30kmで歩行者が渡ろうとするとスピードを緩めて譲ってくれるので、クラクションを鳴らされることはあまりなく、人身事故もほとんど起きないそうである。

スクーターは島内の走行ではヘルメット着用義務はなく、2人乗りも認められているようだ。ちなみに、車もスクーターもほとんどが日本製で、軽トラックもかなり走っていた。路面は石畳が多くガタガタしており、歩行用通路はとても狭いので、車椅子での移動はできそうにない。

街なかを歩いていると、小さな島ということを忘れてしまうほどの建物と車両と人混みの喧騒に包まれているのだが、少し歩くといきなり海に出るため改めて島であることに気付かされ、少し不思議な感覚にとらわれる。



密集する中層ビル



狭い路地



店先まで駐輪されているバイク



ヘルメットの着用義務はない

島の北側は環礁内の海だが、南側には外洋が広がっており高波の影響を受けやすい。そのため、日本の独立行政法人国際協力機構（JICA）が 1987 年から 2001 年にわたって無償資金協力として護岸建設を実施している。この護岸が 2004 年のインドネシアのスマトラ沖地震で発生したインド洋津波による被害を最小限に抑え、マレ島では一人の死者も出さなかったとして、モルディブ政府からグリーン・リーフ賞が日本に授与され、その記念モニュメントが海岸に設置されていた。人工ビーチでは海水浴をする市民が多くいたが、宗教上の理由で肌を露出しないようほとんどの人は着衣で海に入っている。



日本政府の協力により建設された護岸
(外務省 HP より)



グリーン・リーフ賞モニュメント

島の北側には官公庁のほか国立博物館、ミスキーと呼ばれるモスク、魚市場や野菜市場があり、辺りを散策したが、モルディブはイスラム教のためこの日の金曜日が休日である。翌日は建国記念日のため滞在期間中はほとんどの施設が閉館していた。ただ、街のいたる所にモルディブ国旗とインド国旗が掲げられ、独立記念式典をお祝いするムードが高まっていた。



国立博物館



派手な色のモスク

正午からは石神在モルディブ日本国大使ほか、大使館職員との会食へ。

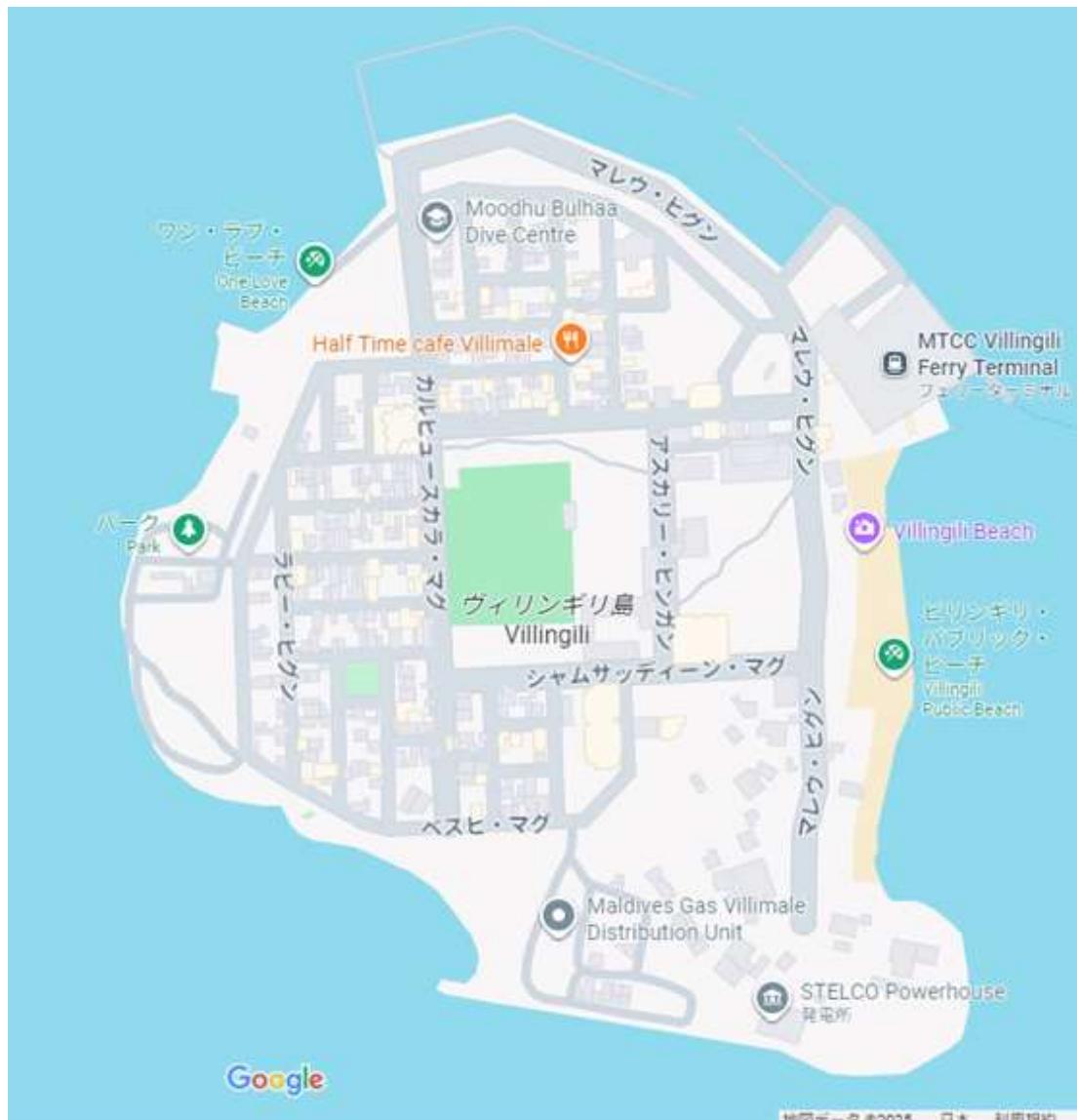
会食中、翌日に執り行われる独立 60 周年記念国旗掲揚式と記念式典におけるモルディブ政府からの招待状を手渡された（参考資料 p. 102）。前日に招待状が届くことに驚きを覚えたが、モルディブに限らず南アジアの国々は、何事も直前まで決まらず当日になって急遽変更になることも日常茶飯事だそうで、日本国大使館の方々も最初は戸惑ったが毎回のことなので、今は文化の違いと認識しているということであった。



在モルディブ日本国大使館の皆さんと

会食後、一旦ホテルに戻り、翌日の独立記念式典や外務大臣との昼食会の段取り、事前に行っておくべき事項の確認、各要人にお渡しする手土産の仕分け作業などを行っている最中に、モルディブ外務省より翌 26 日の午前中に我々小田原市の訪問団とぜひ懇談したいとの連絡が急遽入ってきた。お受けする方向で、その対応と段取りを日本国大使館などと調整した後、午後 4 時に、アリ副大臣らの案内でマレ島に隣接するビリンギリ島の視察へ向かう。

イ ビリングギリ島 (Villingili)



ビリングギリ島地図（出典：Google Map <https://www.google.co.jp/maps/>）

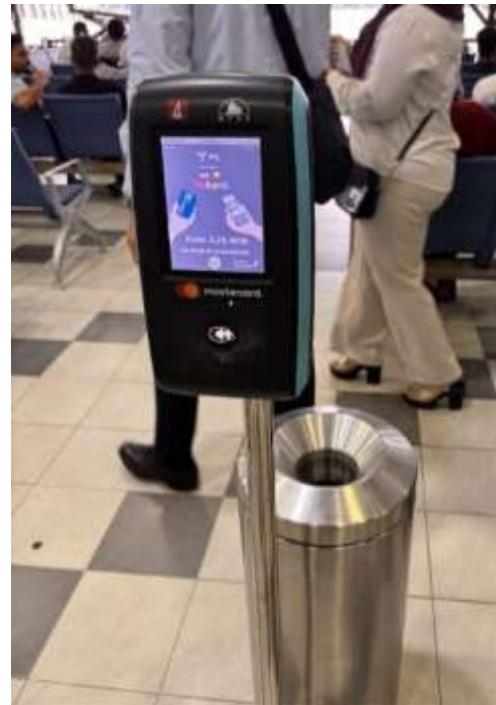
ビリングギリ島は、マレ島の西 2 km の位置にある面積 0.27 平方キロメートルの小さな島で、元々はリゾート島であったが、マレ島の人口増加に伴い住宅地に変えたことで住民が移り住むようになった。人口は約 7,000 人で、マレ島とはフェリーが 10~15 分間隔で 24 時間行き来しており、所要時間は 10 分足らずのため、マレ島に通勤・通学する人も多い。

ビリングギリ島へは、マレ島の南西にあるフェリー乗り場から出港する。チケットは、クレジットカードかスマートフォンをかざして購入する形となっており、片道 3.25 ルフィア（日本円で約 31 円）と格安である。

100 人以上乗れそうなフェリーは、この時の乗船率は 8 割以上とみられ、かなりの人が行き来していることがわかる。船上からはマレ島とビリングギリ島を結ぶ橋が建設されている様子を見ることができた。



ビリングギリ島に向かうフェリー



チケットは IC タッチで支払う



マレ島からビリングギリ島への建設中の橋



完成すると生活が一変するだろう

10分足らずでビリンギリ島に到着すると、都市・地方自治・公共事業省の職員の方が出迎えてくれた。

すぐ近くのオープンカフェで島の概要をお聞きした後、貸切で用意された島内の循環バスに乗ってご案内いただいた。循環バスはすべてEV（電気自動車）で環境に優しく、小さな島内を巡るのにちょうど良い15人乗り（4人が立ち11人が着席）の小型サイズであった。EVバスは6台あり、乗車料金は1回5ルフィア（日本円で約50円）だそうである。ただ、EVバスの充電はまだディーゼル発電で、少しづつ再エネ電気に変えカーボンニュートラルを実現する計画ということであった。



低床のEVバス



バスに乗り込む乗客

島内はほとんど車が走っておらず、大木が連なる自然公園や空き地が適度にあり、高い建物もないため、ゆったりとした雰囲気がある。こうした空き地には必ずと言っていいほど、ジョーリ（Joali）と呼ばれる木や鉄の枠組みに網を張ったとても快適に座れる椅子があり、人々の休息やコミュニティースペースの場になっている（ジョーリは、ビリンギリ島に限らず、マレ島やフォームラク島など住民島のどこでも見られる）。

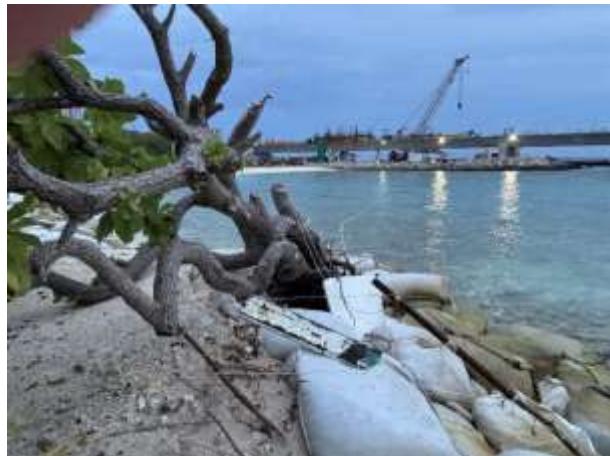


公園に設置されたジョーリ



ジョーリでくつろぐ住民

海岸は、洗堀が進んでいる箇所もあり、土のうやフレコンバッグを積んで凌いでいる。この島では廃棄物処理施設がないらしく、西にあるティラフシ島へごみを運び出す専用船が海岸に停泊していた。



海岸が浸食され倒れた樹木



ごみの島ティラフシ島へとごみを運び込む船



土のうで応急処置しているビリングギリ島の海岸

島はゆっくり歩いても一周 30 分ほどの大きさで、所々に店舗があるがほとんどが静かで落ち着いた住宅街である。2 km 離れた政治・経済の中心であるマレ島よりも格段に小さい島であり、全く趣が異なっていた。



マレ島とは異なり落ち着いた雰囲気



穏やかな街なみ



街なかの至るところで見られる緑の自然



マレ島の喧騒とは 180 度異なる

■カリール元駐日モルディブ共和国大使（元外務担当国務大臣）との懇談

夜は、元駐日モルディブ共和国大使で、元外務担当国務大臣であったアハメド・カリール氏夫妻との会食へ。カリール氏が駐日モルディブ共和国大使時代の2014年に、小田原市とモルディブの交流が始まっている。

当時のヤーミン大統領が来日するにあたり東京近辺で日本らしさを感じられる都市の訪問を希望され、日本の外務省は小田原市を推薦したのだが、体調の都合で大統領の小田原訪問は直前でキャンセルとなり、その謝罪にカリール氏が小田原に来られたことが、以後の交流の始まりとなった。

それ以降、小田原市で開催された国際交流イベント「地球市民フェスタ」への駐日モルディブ共和国大使館の参加や、東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会における事前キャンプに関する協定締結、それに際してのソーリフ大統領の小田原訪問などが続き、約 10 年間にわたる交流へつながっている。

カリール氏とは、この10年ほどの間のお互いの状況を振り返りつつ、今後的小田原市とフォームラク市、さらにはモルディブとの交流推進に向けて、お力添えいただきたいとお願いさせていただいた。同氏はすでに公務を退官されてはいるものの、力を尽くしたいとのご意向をいただいた。余談だが、奥様は伊東市出身の日本人で、小田原のことによく知っていたので、日本を熟知されているご夫妻の存在はとても心強い。



カリールさんご夫妻



夕食会場にて



お互いの絆を再確認する場となった

■モルディブ共和国独立 60 周年記念式典

7月 26 日（土）は、午前 6 時から共和国広場にて行われる独立 60 周年記念国旗掲揚式に出席するため、5 時過ぎにホテルを出発する。会場近くの道路は厳重な警備体制で入場が規制されていたが、我々が乗った政府車両は会場入口まで進入し、下車後はアリ副大臣の先導で会場内へ。

国旗掲揚式は、定刻の 6 時をかなり過ぎて始まった。

近隣各国からの来賓、モルディブ政府高官、国会議員らが勢ぞろいする中、軍の行進の後、音楽隊の演奏とともに国旗が高々と掲揚される。国旗掲揚後は、モハメド・ムイズ大統領に拝謁する機会を得られ、日本の小田原市から訪問した旨をお伝えした。



モハメド・ムイズ大統領への拝謁



共和国広場にて生稻外務大臣政務官、石神大使と



多くの来賓が出席



関係者との記念撮影

国旗掲揚式を終え、在モルディブ日本国大使館の職員に帯同いただき、9時30分よりモルディブ外務省アミン・ジャベド・ファイザル局長らと30分ほど意見交換を実施。「ぜひ小田原市訪問団と懇談をしたい」との連絡が、在モルディブ日本国大使館経由で連絡が入り、急きょセッティングしていただいた場で、小田原市からは、「気候変動による影響など環境面について学び合うような教育交流などを

今後考えていきたい」と伝え、モルディブ外務省としても協力したい旨のご意見をいただいた。



外務省局長との意見交換



モルディブ共和国外務省にて

正午からは、アブドゥラ・カリール外務大臣ら外務省幹部と、生稻晃子外務大臣政務官らとのカリール外務大臣主催の昼食会に参加。日本とモルディブ、小田原市とフォームラク市との交流について前向きな意見交換が行われた。今回、日本から新たな支援事業が提案され、昼食会に先立ってムイズ大統領と生稻政務官との間で協定締結式が行われたこともあり、きわめて和やかな昼食会となった（参考資料 p. 103）。



カリール外務大臣主催の昼食会



小田原市の訪問目的をお伝えした

午後4時からは、モルディブ独立60周年記念式典に出席する。前日までは急な降雨など天候が不安定であったが、この日は晴天でかなり暑く、手元の温度計は38度を示していた。スポットクーラーが置かれていたがほとんど効果はなく、炎天下の中で厳戒態勢のもとインドのモディ首相も迎えて、約1時間にわたって軍のパレード、子どもたちのパフォーマンス、モルディブの伝統芸能の披露などが行われた。大統領やインド首相からの演説等がなかったのはやや残念であったが、今年（令和7年）1

月に、記念式典出席の招待を受けて、こうして記念式典に日本の首長としては唯一参列させていただき、これまでの経緯が思い起こされ、とても感慨深いものがあった。



式典会場の様子



伝統舞踊の披露



式典でのモハメド・ムイズ大統領

独立記念式典終了後の夕方、アリ副大臣の案内でフルマーレ島へ向かった。フルマーレ島へは、空港島であるフルレ島を車で通過して入っていく。この島をつなぐ道路は片側2車線ずつの道路となっており、時速70~80キロメートルのスピードで走行できるようである。

ウ フルマーレ島 (HulhuMale) ³³



フルマーレ島

マレ島

フルレ島

フルマーレ島地図（出典：Google Map <https://www.google.co.jp/maps/>）

フルマーレ島は、首都機能の集中するマレ島の人口増加や気候変動に伴う海面上昇への対応として、住宅政策の一環で 1997 年に政府がプロジェクトを開始し、人工的に作られた島である。この島はマレ地域の既存及び将来の住宅、産業、商業開発の需要を満たすため、海拔 2m に埋め立てられ、モルディブ全体で 4 番目の大きさを誇る約 4 平方キロメートルの面積を持つ。現在までに約 65,000 人が居住しており、フェーズ 1 の開発がほぼ完了、フェーズ 2 が 5 % 進行中、フェーズ 3 が最近始まったところで、さらなる埋め立てによって島の面積を 2 倍に拡張し、2050 年頃までに最大 24 万人が住めるようとする計画となっている。

フルマーレ島は、人口増加や海面上昇といったモルディブが抱える課題に対する解決策として設計されており、スマートシティの構築を目指している。

³³ 荒井悦代・今泉慎也（編著）. エリア・スタディーズ 186 モルディブを知るための 35 章. 明石書店. 2021 年, P115. 118. 119. 120

最新の IoT（モノのインターネット）技術や AI（人工知能）技術を活用し、エネルギー効率を高め、環境配慮型の街づくりを推進している。また、低炭素公共交通として路面電車の導入を検討し、日本の富山市との協力を要請しているほか、太陽光発電や有機廃棄物を活用したバイオガスなどの低炭素化・脱炭素化技術を導入することで、持続可能な社会を目指している。こうした取り組みは、気候変動に直面する他の島嶼国、特にマーシャル諸島などへのモデルケースとして世界的に注目されており、フルマーレ島は人類の生存をかけた壮大な実験場ともいえる。

さらに、2018 年には中国の投資によりフルマーレ島とマレ島を結ぶ橋が開通し、従来は船や飛行機に依存していた島同士の移動が天候に左右されることなくスムーズに行えるようになり、交通利便性が大幅に向上している。

フルマーレ島に入ると、大きな工場や中高層マンションが立ち並ぶ光景が目に飛び込んできた。計画的に作られた広い道路と広い区画が整備され、今後建設されると思われるマンション用の空き地もまだ多く残っている。すでに建設された中高層マンションには、ベランダに洗濯物を干している住戸も見られ、多くの住民が暮らしていることがわかる。一戸建ての住宅は一切なく、大規模な建物が立ち並び、横浜のみなとみらい地区のような都会的な風景が広がっており、自然豊かな南国諸島のモルディブのイメージが覆された。



立ち並ぶ高層マンション



未開発のエリア

フェーズ 1 のエリアはすっかり都市化されているものの、少し離れたフェーズ 2、フェーズ 3 のエリアに入ると、ほとんどが大きな空き区画となっており、時折、多くの作業員を載せた車両とそれ違った。中には廃墟のような建物が残っているところや草木が生い茂ってジャングルのようになっているところもあり、フェーズ 1 との

落差が激しい。ただ数年後には、ここも中高層マンションなどの大規模建築物が立ち並び、より多くの人々が生活するようになるそうである。



夜店の様子



暗くなってもにぎやかであった



現地のスーパー・マーケット



ラップに包まれて販売されている魚

ビーチ近くの臨海公園には常設の屋台が並ぶエリアがあり、夕暮れから夜間にかけてマンションに暮らす人々が集い、談笑しており、コミュニケーションの場となっていた。

イスラム教では飲酒が禁止されているためか、夜の屋台においても大きな声で騒ぐような場面に一斉遭遇せず、健全に余暇の時間を楽しむ風景が見られた。これはイスラム教の影響があるのかもしれないが、訪問を通して、モルディブの方々が穏やかで優しい人柄であると感じたところである。

7月27日（日）最終日は、午前11時にホテルを出発するまでの時間を利用し、再度ビリンギリ島を視察。もう少しじっくりと歩いて島の朝を体感したかったためである。

フェリーに乗って島に着くと、乗り場の目の前にある自然公園のような所で多くの女性が清掃活動を行っていた。聞くところによると、昔は無償ボランティアでやっ

ていたが、今は有償で実施しているそうである。

通りを散策していると、ウンドーリ（ジョーリが木にぶら下がっているもの）に座ってくつろいでいる男性たちや、カフェで談笑している人たち、公園に設置された健康増進器具で運動する人たちがおり、平日の朝早くからのんびりと活動している様子がうかがえた。



自然公園での清掃作業



公園で運動する住民

そのほか、海岸や住宅街、スーパーマーケットなどを見て回り、1時間半ほど観察して、マレ島に戻り、土産店をいくつか回ってホテルに帰った。

そして、午前11時にホテルを出発し、空港へ。4日前の到着時に見た新ターミナルビル前の未整備だった道路灯は、すでにしっかりと整備されており目を疑った。どうやらこの国は直前までのんびりとしているが、土壇場できっちりと整える文化のようである。

空港では4日間ずっと帯同し様々なサポートをしていただいたアリ副大臣に感謝を申し上げ、チェックインカウンターで最後のお別れを告げ、モルディブを出国した。



訪問中、常に帯同していただいたアリ副大臣ともお別れ（左から2人目）

8. 参加した公式行事等

7月 23日（水）

- ・モルディブ共和国 都市・地方自治・公共事業省副大臣、石神在モルディブ日本国大使らとの歓迎昼食会

7月 24日（木）

- ・フォームラク市長らとの意見交換、フォームラク市内視察、フォームラク市長らとの夕食会

7月 25日

- ・石神在モルディブ日本国大使らとの昼食会

7月 26日

- ・ビリンギリ島視察
- ・フルマーレ島視察
- ・モルディブ共和国外務省 アミン・ジャベド・ファイザル局長と意見交換
- ・アブドゥラ・カリール モルディブ共和国外務大臣との昼食会
- ・モルディブ共和国独立60周年記念 国旗掲揚式・式典参列

9. 協力いただいた公的機関等

フォームラク市

モルディブ共和国外務省

モルディブ共和国都市・地方自治・公共事業省

駐日モルディブ共和国大使館

日本国外務省

在モルディブ日本国大使館

10. 訪問所感

今回のモルディブ訪問では、一般的にイメージされている南国の楽園のようなリゾート島ではなく、現地の人々が生活している住民島を視察した。4つの住民島を訪れたが、どの島もみな違った特徴があり、短期間の滞在でモルディブの多面性を垣間見ることとなった。

招待いただいたフォームラク市があるフォームラク島は、モルディブの中でも最も南方に位置し、豊かな自然が広がる森に住居が点在し、のんびりした時間が流れる中、素朴で穏やかな生活が営まれていた。

マレ島は、首都マレ市の中心であり、密集した建物におびただしい数のスクーター、多くの人々が行き交う混沌とした街で、活気に満ちていた。

ビリングギリ島は、喧騒に包まれたマレ島を間近に臨む距離にありながら、こじんまりとした静かな住宅地が広がっており、環境に優しい生活区として整備されていた。

フルマーレ島は、海面上昇に耐えられる居住地確保のために埋め立てられた土地であり、高層ビルや大きな工場が立ち並び、極めて都会的な暮らしを提供しながら発展を続けていた。

島によってこれほど趣の違いを感じるものかという驚きは、訪れてみて初めて感じられるもので貴重な経験であった。また、いずれの島も地球温暖化による海面上昇の影響を受けている様子をこの目ではっきりと確認できたことは、今後の本市の政策を考える上で、極めて重要な訪問であった。

こうした個性のある島をはじめ、約 200 もの小さな有人島を持つモルディブの人口は、わずか 55 万人。限られた資源と小さな財政規模の中で、統一的な施策展開をしにくい環境にあり、国家運営の難しさが容易に想像される。そのような中、独立を果たし 60 年も発展し続けてきた国の努力は相当なものだったと思われる。

実際、モルディブは諸外国との協力体制を築き、多くの支援を受けながら発展してきており、日本からもこれまでかなりの経済的支援を行っている。そのため、モルディブの日本に対する信頼は厚く、今回の視察ではどこに行っても温かく熱烈な歓迎を受け、とても友好的な姿勢を示していただいたことは、今後の交流のあり方を考える上で非常にプラスの要素になると、改めて実感した。

モルディブ国内では、これまで姉妹都市提携による交流の実績はなく、今回の小

田原市の訪問を契機に姉妹都市提携を実現させたいという強い想いがあり、交流を希望するフォームラク市はもちろんのこと、モルディブ政府からもそうした意向を強く感じた。国の独立記念式典に、日本の都市として唯一招待されたということもその証左であり、訪問中にモルディブ外務省が直々に我々に懇談を申し入れてこられたことからも交流に対する強い期待が伺える。

ただし、姉妹都市提携に当たっては、まずはお互の状況や課題等を確認しつつ、交流を深めて、市民レベルにおいても機運の醸成などが図られた先にあるものであり、今回交流を希望しているフォームラク市を訪問し、意見交換を踏まえて、同じ認識に至ったところである。

気候変動に対する危機については、海岸侵食の実情を見て実感したところではあるが、一方で廃棄物処理が進んでいない現状や、ディーゼル発電に頼らざるを得ないという課題も認識し、モルディブ国内での取り組みを一層進めていかなければならぬことを実感した。この問題については、市として直接的に貢献できることは少ないが、例えば今後、若者同士の交流の中で本市の廃棄物処理の状況を視察してもらい、本国に帰って共有を図り将来の課題解決に取り組んでもらうなど、環境をテーマとした相互交流を図っていくことなどが考えられる。交流した GN アトール教育センターでは、将来環境分野で貢献する人材になりたいと願う生徒さんもあり、日本での学びを欲している様子であった。

小田原市としても、海・森などの豊かな自然環境や農業・漁業などがあり、穏やかで優しい人々がいる平和なフォームラク市を小田原の若者や子供たちが訪問し、体験することは、人にとっての幸せや本当の意味での豊かさとは何かを考える上で、非常に大切な学びになると感じたところである。すぐには相互交流という形は難しいかもしれないが、まずは何らかの形で交流を始めていき、将来的には若者同士の相互交流へつなげていきたいと考えている。

最後に、今回の視察に当たり、訪問の準備段階から、モルディブ側との調整にご尽力いただいた駐日モルディブ共和国大使館をはじめ、現地での手厚い歓迎や案内をしていただいたフォームラク市の方々、また様々な調整やサポートをしていただいたモルディブ政府と日本国外務省、日本国大使館の皆様など、訪問に携わっていただいたすべての方々に深く感謝を申し上げたい。

11. 今後想定する展開

これまでの約 10 年に及ぶ交流、今回のフォームラク市やマレ市などの訪問、そして、フォームラク市長や外務大臣等との意見交換などを経て、友情や協力関係が築けたことや、モルディブ共和国・フォームラク市からの交流を続けたいという気持ちを受けたことから、気候変動対策や文化交流などをテーマとして、交流を発展させるため、今後の想定する展開は次の 3 つと考える。

- ・お互いを知り、友情を深め、市民意識の醸成を図るための市民・文化交流
- ・小田原の現状を知っていただくための、モルディブ共和国及びフォームラク市訪問団の受け入れ
- ・将来的な若者同士の相互交流を見据えた交流事業の実施

(参考文献)

- ・エリア・スタディーズ 186 モルディブを知るための 35 章
荒井悦代・今泉慎也編著 株式会社明石書店
- ・地球の歩き方 C08 モルディブ 2020～2021 年版
地球の歩き方編集室 株式会社 Gakken
- ・FINDING FUVAHMULAH DANIEL BOSLEY
MINISTRY OF ENVIRONMENT & ENERGY Republic of Maldives
- ・Report_6_Months_2024_fuvahmulah.pdf
Fuvahmulah City Council Officialweb site
- ・地域・分析レポート「繁栄する島国、モルディブ」
日本貿易振興機構 (JETRO) 2023.9.29、2023.11.7
- ・ビジネス短信「モルディブ、首都近郊のビリングギリ島を開発へ、債務や観光依存には懸念も」
日本貿易振興機構 (JETRO) 2024.3.6
- ・MULTIHAZARD RISK ATLAS OF MALDIVES Biodiversity-Volume IV March 2020
Asian Development Bank
- ・Action and Management Plan Fuvahmulah Biosphere Reserve May 2023
Ministry of Environment, Climate Change and Technology Gov. Maldives
- ・国際観光地における水産物を含む日本産食材調達実態・可能性調査 (モルディブ)
日本貿易振興機構 (JETRO) コロンボ事務所農林水産食品部 市場開拓課
2024.3
- ・令和 4 年度脱炭素社会実現のための都市間連携事業委託業務 (富山市・マレ市都市間連携による持続可能な環境配慮型都市 (スマートシティ) 構築支援事業) 報告書
日本エヌ・ユー・エス株式会社 富山市 2023.3
- ・モルディブ共和国マレ首都圏における太陽光発電導入計画プロジェクト形成調査
報告書
独立行政法人国際協力機構 (JICA) 経済開発部 2008.3

- ・モルディブ国次世代型熱分解炉を活用した廃棄物処理システム案件化調査業務完了報告書

独立行政法人国際協力機構（JICA）、株式会社技和テクノス 2018.1

- ・Climate Change Adaptation Strategies in the Maldives

Ibrahim Mohamed. (PhD). Council Member Maldives National University

国際セミナー「海面上昇と気候変動への適応：モルディブ人工島フルマーレの事例と国内移住政策」プレゼン資料 2025.5

參考資料



Ref No: 468-U05/PRIV/2024/162
21st November 2024



Mr Kenichi Katō
Odawara City
Kanagawa Prefecture
Japan

Subject: Invitation to Visit Fuvahmulah City

Dear Mayor,

Warm greetings from Fuvahmulah City!

On behalf of the Fuvahmulah City Council, I am honored to extend an invitation to you to visit our city, Fuvahmulah, in the Maldives. This invitation follows the productive discussions on June 22, 2023, between the Maldives Embassy in Japan and Odawara City's Deputy Mayor, where the idea of establishing a sister city relationship was explored.

We would be delighted to host you and your team to discuss the proposed sister city partnership and to give you an opportunity to experience our local culture firsthand. This visit will serve as an excellent platform for us to strengthen the bond between our cities and share ideas on areas of mutual interest.

We will be pleased to provide local hospitality for you and up to four members of your delegation during your stay.

We look forward to your positive response and to furthering the collaboration between Odawara and Fuvahmulah. Please do not hesitate to reach out if you require additional information or assistance.

Yours Sincerely,


Ismail Rafeeq
Mayor



たったひとつの地球に 住み続けるために 私たちが今できること

国際的な視点から考える環境と 気候変動がもたらす影響、そしてその解決策

【モルディブ：危機に瀕する楽園】



※2017年と2018年の写真は同じ場所で、海面上昇により砂浜が浸食されてしまった。



※2014年と2022年の劇的な変化を浮き彫りにしている。海面上昇により木々が全て枯れ、何もない島になってしまった。

2025年1月25日土 | 小円原三の丸ホール 小ホール

PROFILE

【講 師】



一般社団法人SWiTCH さざまな
代表理事 佐座 槟苗

1995年生まれ。福岡出身。カナダ ブリティッシュ・コロンビア大学卒業。ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン大学院 サステナブルデベロップメント専攻。Mock COP26 グローバルコーディネーターとして140カ国の若者に呼びかけ、COP26で環境教育サミットを開催、国際的に注目を浴びる。2021年 一般社団法人SWiTCHを設立。2023年 Forbes JAPAN 30 UNDER 30に選出される。2024年 日本学術会議連携会員(特任)に就任。COP26・COP28・COP29日本政府団として参加。

一般社団法人SWiTCH

一般社団法人SWiTCHは、地球1つで暮らしていくために、若者が中心となり、世代・業界・国境を越えて共創するプラットフォームです。

2030年までに持続可能な開発を目指す「SDGs」と、2050年までに温室効果ガス削減を目指す「パリ協定」を成功させるために、大学・企業・自治体など多くの方々と様々な取り組みを行っています。

詳しくはこちら: <https://switch.bio>



講演内容

グローバルから地域へ: COP29を受けての 小田原市の気候変動対策

気候変動は、もはや地球規模の課題から、私たちの日々の暮らしでも喫緊の課題となっています。

2024年11月にアゼルバイジャンで開催されたCOP29での国際的な議論を踏まえ、小田原市は地域としてどのように気候変動対策に取り組んでいくべきなのか。本講演では、気候変動に関するグローバルな最新動向をお話するとともに、地方自治体として具体的な施策や、市民一人一人ができるアクションについて考えるきっかけを提供します。地球一個分の暮らしの実現に向けて何ができるのか共に探ってまいりましょう。

【パネリスト】



小田原市長
加藤 憲一

小田原の大きな魅力である森里川海がすべて揃ったオールインワンの自然環境。この豊かな自然の恵みや多彩な地域資源を活かし、食やエネルギーといった私たちのいのちを支える要素はできるだけ地域で整え、分かち合う、持続可能な地域社会の実現を目指しています。現在、地域の再生可能エネルギーを増やしていく取り組みを市民や事業者とともに進めており、その電気を市内で有効活用していく仕組みづくりに取り組んでいます。



小田原箱根商工会議所
ECHO
タスクフォース 委員長
小田原ガス株式会社 代表取締役社長
湘南電力株式会社 代表取締役社長

原 正樹

ECHOは「Energy Consortium of Hakone Odawara」の略称で、小田原箱根地域の産官学民が一体となり、エネルギー分野における地球環境への貢献、そして持続可能な地域づくりを目指しています。私が経営に携わる湘南電力(株)による、再生エネルギーを用いた電力事業をプラットフォームとし、地産地消に根差した気候変動対策アクションを進めていきます。

臨時代理大使 シャフラズ・ラシード

Embassy of the Republic of Maldives (駐日モルディブ共和国大使館)

講演内容

小島嶼開発途上国(SIDS)に於ける 気候変動外交—モルディブの事例

サンゴ礁が劣化することです。これらのサンゴ礁は、嵐による波の影響から島々を守るだけでなく、海洋生物多様性、水産業、観光業を支える重要な基盤でもあります。特に観光業は、GDPに大きく寄与しており、気候変動による影響を受ける可能性が高い、手つかずの美しいビーチと豊かな海洋生態系に依存しています。

気候変動がモルディブにもたらす社会経済的影响は広範囲に及びます。生計の主要な手段である水産業の混乱や観光収入の減少は、国の経済を直接脅かします。さらに、海面上昇や極端な気象による住民の移動リスクは、国内外で法的および政治的課題を引き起こします。モルディブはこれらの課題に対処するため、さまざまな適応および緩和戦略を採用しています。国内では、海面上昇に対抗するための防波堤や人工島の建設、化石燃料への依存を減らすための太陽光や風力などの再生可能エネルギーへの投資、持続可能な観光の促進が行われています。また、海水淡水化プラントや雨水採取システムが淡水不足に対応しており、サンゴ礁や海洋生物多

様性を保護するための生態系に基づくアプローチも進められています。

国際的には、モルディブは地球規模の気候行動を推進するリーダー的役割を果たしています。パリ協定などの気候交渉に積極的に参加し、脆弱な国々を支援する道義的責任を強調しています。また、モルディブは回復力を高めるプロジェクトを実施するための資金援助や技術支援を求め、他のSIDSと地域的に協力して共通の課題に取り組んでいます。

これらの努力にもかかわらず、大規模な適応策を実施するための物理的および財政的制約は依然として大きく、温室効果ガス排出を抑制するための世界的な行動が必要不可欠です。モルディブにとって、気候変動との戦いは単なる環境問題ではなく、存続の問題なのです。

モルディブの事例は、気候変動を緩和し、脆弱な地域で回復力を構築するための地球規模の協調行動の緊急性を浮き彫りにしています。また、この世界的危機に対処する共有責任を思い出させ、特に最も脆弱な国々の持続可能な発展を確保する必要性を強調しています。

【ファシリテーター】



小田原箱根商工会議所
気候変動
タスクフォース 委員長
株式会社 まるだい運輸倉庫
代表取締役社長

秋元 美里

「株式会社まるだい運輸倉庫」の4代目代表取締役で、小田原市教育委員として地域教育の充実に努めています。2024年には、社内で「リユース企画」を立ち上げ、不用品廃棄削減に成功。この取り組みが評価され、小田原箱根商工会議所主催の気候変動アワード大賞を受賞しました。女性経営者として、多様性を活かしたリーダーシップを發揮し、物流業界と地域社会の持続可能な発展を目指し活動を続けています。



小田原海外市民交流会
(OIFA)会長
鈴木 悅介
小田原箱根商工会議所 会頭

1955年小田原生まれ。家業のかまぼこ製造販売業の海外展開のため、1981年から1991年まで米国ロスアンゼルスに在留。帰国後、鈴廣かまぼこの経営に携わり、現在、取締役相談役。2013年より小田原箱根商工会議所会頭。暮らしと経済を根幹から握るがす気候変動は中小企業にとっても自分事と捉え、啓発と実践の活動に取り組んでいます。2013年よりOIFA会長として、「世界の中の日本、日本の中の世界」をテーマに国際交流事業を展開中です。

タイムテーブル

14:00～開会の挨拶

第1部

14:05～講演 ①佐座楨苗氏

内 容:グローバルから地域へ:

COP29を受けての小田原市の気候変動対策

15:00～講演 ②シャフラズ・ラシード氏

内 容:小島嶼開発途上国(SIDS)に於ける
気候変動外交—モルディブの事例

第2部

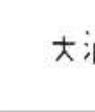
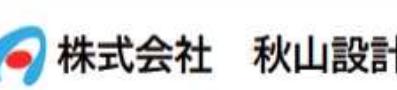
16:00～パネルディスカッション

テーマ:たったひとつの地球に住み続けるために
私たちが今できること

出 演 者

- 佐座楨苗氏
- シャフラズ・ラシード氏
- 加藤憲一 小田原市長
- 小田原箱根商工会議所
ECHOタスクフォース 委員長
(小田原ガス株式会社・湘南電力株式会社
代表取締役社長) 原正樹氏
- 小田原箱根商工会議所
気候変動タスクフォース 委員長
(株式会社 まるだい運輸倉庫 代表取締役社長)
秋元美里氏
- 小田原海外市民交流会 会長 鈴木悌介氏
(小田原箱根商工会議所 会頭)

【協賛】

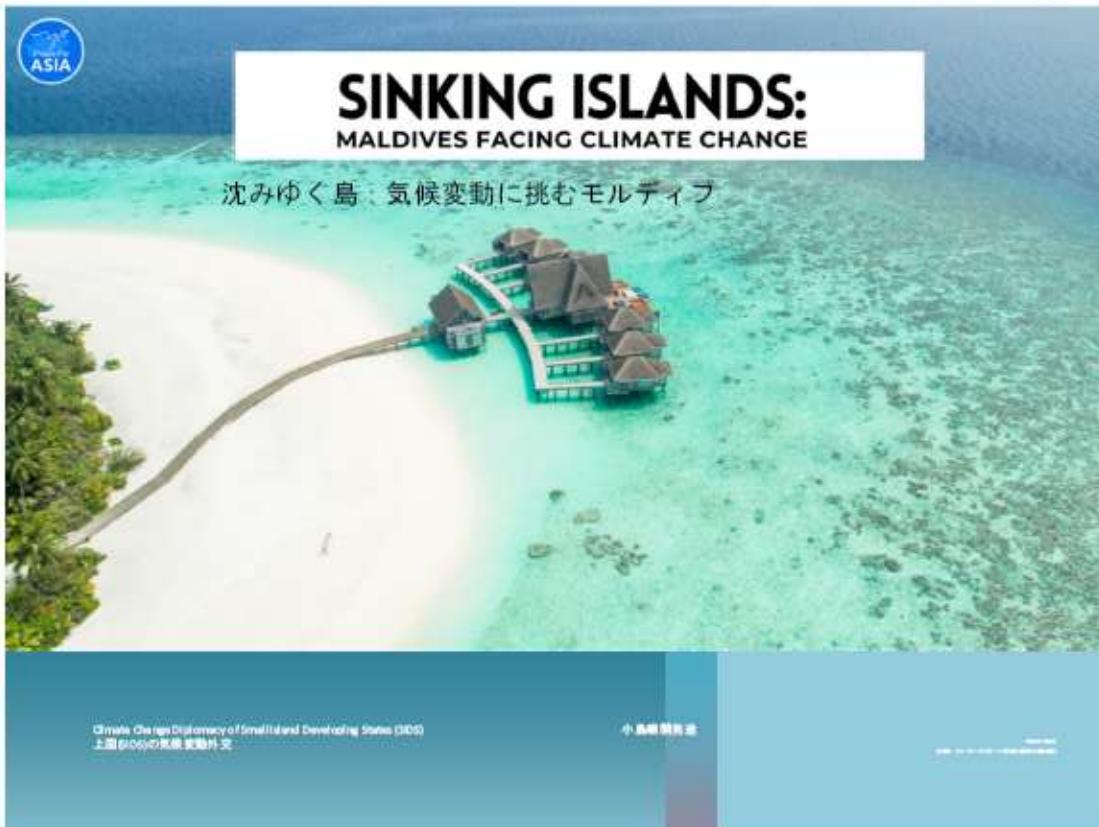
 有限公司 津田製作所 TSUDA Manufacturing Co., Ltd.	 総合コンサルティング 株式会社 ビッグ・ジャパン BIG Japan Co., Ltd.	 富士屋ホテルズ&リゾーツ FUJIYA HOTELS & RESORTS		
 株式会社 東海ビルメンテナス	 開業総鎮守 天下の旅で運闇 箱根神社 元箱根町1-1 TEL 0460-83-7123	 大涌谷くろたまご館 KURO-TAMAGO-NO-OKA		
株式会社 仙郷樓	 HI-TEC 【空調設備設置・修理】	FLOWER & LIFE HANAMASA since.1935		
公益社団法人 小田原青年会議所	株式会社 小田原魚市場	 太陽建機レンタル株式会社		
	西湘ビルメンテナンス 協同組合	Meiji Seika フルマテック		
 私たもの街の安心をつくる	 箱根登山バス Hakone Tozan Bus	 さがみ信用金庫 井奈川県小田原市浜町1丁目4番28号 TEL 0465-24-3161 (代表)		
	 あたらしいを、あたりまえに J:COM	 ASO アソ一社工事株式会社 https://www.aso-n.com		
	 ユネッサンリゾート HAKONE KOWAKIEN	 瀬戸建設株式会社 SETOMEN		
	 学校法人 新名学園 旭丘高等学校	 新しい生きるを、創る。 日本新薬株式会社		
		有限会社 足柄リハビリテーションサービス ARS 社会実践 社会貢献 地域をリハビリテーションする会社		
 創業明治36年	箱根モビリティサービス株式会社	 小田原海外 市民交流会	 小田原箱 商工会議所	 小田原市

協賛団体
会 員 株式会社小田原衛生公社／小田原卸商業団地協同組合／小田原箱根商工会議所
公益社団法人小田原青年会議所／LIBERTY小田原日本語学校

主 催：小田原海外市民交流会・小田原市・小田原箱根商工会議所

事 務 局 小田原市文化政策課 tel:0465-33-1703 fax:0465-33-1526

メールアドレス:cultural-95 hange@city.odawara.kanagawa.jp



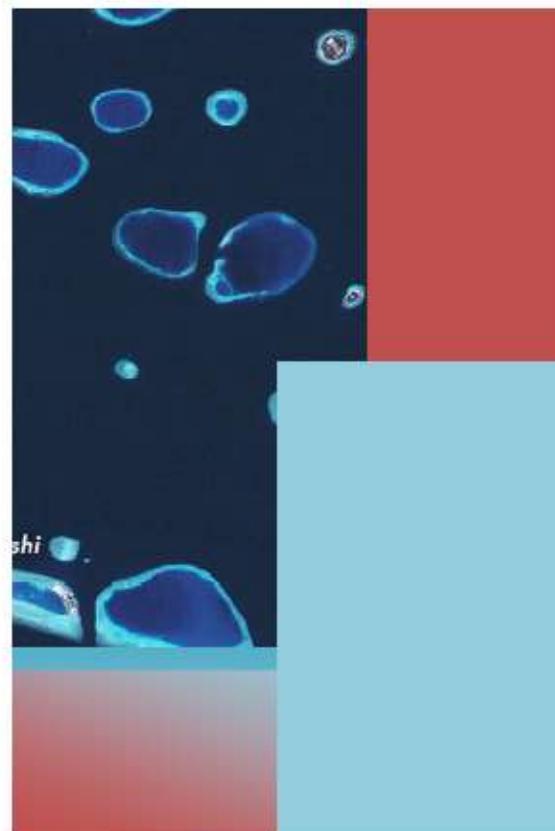
Introduction概要

SIDS are highly vulnerable to climate change due to rising sea levels, extreme weather, and economic reliance on natural resources.

小島嶼開発途上国（SIDS）は、海面上昇や異常気象に加え、海洋資源に依存した経済構造により、気候変動の影響を受けやすい状況（脆弱）にある。

The Maldives serves as a critical case study for exploring these challenges and strategies.

モルディブは、これらの課題と戦略を探る上で重要なケーススタディとなっている。



Impact of Climate Change on SIDS

小島嶼開発途上国に対する気候変動の影響

• Geographical Vulnerability: 地理的脆弱性

- Low-lying islands threatened by rising sea levels and coastal erosion.
海面上昇と陸地の浸食によって脅かされる低地の島々。

• Economic Impact: 経済的な影響

- Tourism, fisheries, and agriculture disrupted by climate change.
観光業、水産業、農業が気候変動によって影響を受けています。
- Strain on public finances and development efforts.
公共財政や開発努力に対する負担が増加。



The Maldives: A Case Study モルディブ：ケーススタディ(事例)

Geographic and Economic Overview:

地理的および経済的概要
Over 80% of land is less than 1 meter above sea level.
陸地の80%以上が海面から1m未満の高さに位置。
Economy relies on tourism and marine resources.
経済は観光業と海洋資源に依存。

Climate Change Threats:

気候変動による脅威
- Rising sea levels and coral reef degradation.
海面上昇とサンゴ礁の退化
- Extreme weather events impacting infrastructure and livelihoods.
インフラと日常生活に影響を与える異常気象。



Maldives' Climate Diplomacy モルディブの気候外交

- International Advocacy: 國際的な活動
- Leading the Alliance of Small Island States (AOSIS)
- 小島嶼国連盟 (AOSIS) のリーダーシップ
- Advocating for the 1.5°C target in the Paris Agreement.
- パリ協定における目標値 1.5°C の擁護
- Key Achievements: 実現に向けた具体的な動向の検討と推進
Promoting the Maldivian Vision and real force-building initiatives.
マラケシュ・ビジョンとレジリエンス構造のイニシアチブを先駆けて実施する
- Challenges: 関連
- Limited resources and reliance on external agreements. 節約された資源と道徳的な立場への依存性



Strategies and Solutions 戦略と解決策

- National Adaptation and Mitigation: 國家的適応と緩和策
- Investment in climate-resilient infrastructure and renewable energy.
気候変動に強いインフラと再生可能エネルギーへの投資
- Global Partnerships and Funding: 國際的パートナーシップと資金調達
- Securing climate finance and strengthening alliances.
気候資金の確保と連携の強化
- Allocation of climate finance strategically 気候資金の戦略的配分
- Allocation of climate finance strategically
- Innovation in Diplomacy: 外交におけるイノベーション
- Leveraging technology and symbolic actions for global advocacy.
グローバルな提唱活動のために、技術や象徴的な行動を活用



The Future of SIDS in Global Climate Policy SIDSの未来と国際気候政策

Potential Scenarios: 考えられるシナリオ

Best-case: Strong cooperation leads to reduced emissions and resilience support.

最高なシナリオ：強力な協力で排出削減とレジリエンス支援が実現される

Worst-case: Insufficient action results in displacement and loss of territory. 最悪なシナリオ：不十分な対策により、住民の避難と領土の消失が進行する

Role of SIDS: 小島嶼開発途上国(SIDS)の役割

- Continue to lead with moral authority and innovative solutions.

道義的権威と革新的な解決策で引き続きリーダーシップを發揮して行く

Conclusion 結論

The Maldives exemplifies the critical role SIDS play in global climate governance.

モルディブは、SIDSが国際的な気候ガバナンスで果たす重要な役割の模範となっています

Their advocacy highlights the urgent need for comprehensive and equitable climate action.

我々の提唱活動は包括的で公平な気候対策の必要性を強調しています

Global commitment is essential for the survival of vulnerable nations.

脆弱な国々の生存には、世界的なコミットメントが不可欠です





モルディブ共和国都市・地方自治・公共事業省副大臣からの招待状



Ministry of Cities, Local Government and Public Works

Male', Republic of Maldives

12th June 2025

Honorable Mayor Kenichi Kato
Odawara City
Kanagawa Prefecture
Japan

Subject: Official Invitation for the Mayor's Visit to the Maldives

Your Excellency,

Greetings from the Ministry of Cities, Local Government and Public Works.

It is with great pleasure that I write to you on behalf of the Ministry of Cities, Local Government, and Public Works of the Republic of Maldives.

We have received with appreciation your letter expressing interest in undertaking an official visit to the Maldives, with the purpose of exploring the potential for establishing a sister city relationship between Odawara City and Fuvahmulah City.

In this regard, I am pleased to extend a formal invitation to Your Excellency to visit the Maldives in July 2025. We look forward to the opportunity to welcome you and your delegation, and to engage in discussions aimed at fostering cooperation and strengthening the bonds of friendship between our two cities and our two nations.

モルディブ共和国都市・地方自治・公共事業省副大臣からの招待状



Ministry of Cities, Local Government and Public Works

Male', Republic of Maldives

We remain confident that this visit will contribute meaningfully to advancing mutual understanding and collaboration in areas of shared interest and will pave the way for a fruitful and enduring partnership between Odawara City and Fuvahmulah City.

Please accept the assurances of my highest consideration and best wishes for the success of this forthcoming visit.

We look forward to welcoming you to the Maldives.

Yours sincerely,

Aminath Namza

Deputy Minister

Ministry of Cities, Local Government, and Public Works

Republic of Maldives



モルディブ共和国独立 60 周年国旗掲揚式招待状



Ministry of Dhivehi Language,
Culture and Heritage
Male', Maldives

The Minister of Dhivehi Language, Culture & Heritage,
Mr. Adam Naseer Ibrahim cordially invites you to attend the
official Flag Hoisting Ceremony on the occasion of the
Independence Day of the Republic of Maldives.



Republic
Square



26th July 2025
05:40 hrs.



National Dress / Suit
Shirt & Tie / Formal



National Dress /
Traditional Dress

Please RSVP by 24th July 2025, 16:00 hrs. Please scan the QR code on the back of this card.

モルディブ共和国独立 60 周年記念式典招待状



Ministry of Dhivehi Language,
Culture and Heritage
Male', Maldives

The Minister of Dhivehi Language, Culture & Heritage,
Mr. Adam Naseer Ibrahim cordially invites you to attend the
military display, procession, and festivities held to mark the
Independence Day of the Republic of Maldives.



Republic
Square



26th July 2025
15:45 hrs.



National Dress / Suit
Shirt & Tie / Formal



National Dress /
Traditional Dress

Please RSVP by 24th July 2025, 16:00 hrs. Please scan the QR code on the back of this card.

モルディブ共和国外務大臣主催昼食会招待状



*His Excellency Dr. Abdulla Khaleel,
Minister of Foreign Affairs of the Republic of Maldives
requests the pleasure of the company of*

Mr. Kato Kenichi

*at a lunch held
on Saturday, 26 July 2025
at 1200 hrs at Bheaven – Rooftop,
Barceló Nasandhura Male'*

Dress Code: Official

RSVP: 7762799

令和 7 年（2025 年）12 月発行

令和 7 年度 モルディブ共和国訪問 報告書

発行 小田原市